



名人と出会い、 自分と出会う

—「聞き書き」と海洋教育の可能性—

近年、日本は「無縁社会」とか、「孤立社会」といわれるようになりました。家族間、友人間、組織内、地域内の人のきずなが薄れてきています。生産と消費も分離しています。自分の生命（いのち）が、何処につながっているのか、実感できません。核家族や単身世帯が増える中で、世代間の伝承も途絶し、「今さえ、楽しければいい」という風潮が広がっています。思考スパンが短くなり、過去や未来への想像力も枯渇し、人間関係が希薄になる。その先には、すべてを無視し、無気力になる状態しかありません。

他者とのつながりを「つまらない」「めんどろ」だと感じるようになった現代人の会話は、メールや LINE が中心になりました。お互いの距離が離れていても通じる。挨拶は「おはよう」の4文字で済ませることができる。一見便利ですが、本当にそうでしょうか。「おはよう」をデジタルの情報量に置き換えると 8bite。一方、直接会って「おはよう」と言うと、73,728,000bite の情報量になるといいます。声の大きさや抑揚、目の動き、顔色や表情、手の仕草……対面していれば、そのすべてが伝わります。「おはよう」ひとつで、「今日は元気がないけれども、大丈夫かな」と、相手を思いやることもできるのです。

「聞き書き」は、人と対面し、対話する行為です。ただ「聞く」だけではなく、録音した言葉を文字に書き起こし、何度も反芻して作品にまとめていきます。その行為によって、相手の存在を丸ごと受け止め、共感し、共鳴することができるのです。

「つまらない」「めんどろ」だと、関係性を絶ってばかりいては、人は幸せにはなれません。「無関心」や「無視」は、愛情が枯渇した状態でもあります。人が幸せになるためには、お互いが「関心」をもち、「共感」すること。つまり、関係性をもつことが不可欠なのです。

「聞き書き」は、人と人、人と自然、世代と世代をつなぎます。本書では、私たちの活動の原点である「聞き書き甲子園」と、その活動から展開した小・中学校の海洋教育における「聞き書き」を紹介しています。「海は眺めるもの」でしかなかった子どもたちが、どのようにして海に関心をもつようになっていったのか。2つの学校事例は、総合的な学習に取り組む先生方、あるいは、これから海洋教育に取り組んでいく先生方の参考にもなるでしょう。

あなたの身近な子どもたちは、ふるさとの海や森に関心をもっていますか。人を思いやる優しさがあるでしょうか。関係性をつなぐ、その先には、持続可能な、幸せな社会がきっとあるはずです。

名人と出会い、 自分と出会う

—「聞き書き」と海洋教育の可能性—

はじめに	1
第1章 高校生による聞き書き—聞き書き甲子園の活動—	3
“塩野流” 聞き書き術	7
聞き書きの作品例	19
第2章 中学生による聞き書き—備前市立日生中学校の活動—	23
「聞き書き」手法のまとめ	40
第3章 小学生による聞き書き—三原市立木原小学校の活動—	48
第4章 聞き書きのアウトプットの形	55
あとがき	59



第1章

高校生による「聞き書き」 —聞き書き甲子園の活動—



「聞き書き」というと、民俗学で行われる聞き取り調査やオーラルヒストリー（口述歴史）を思い浮かべる人が多いかもしれません。いずれも調査研究や記録のために「聞き書き」の手法を活用しているわけですが、本来、「聞き書き」は、人と人が出会い、理解しあい、深く通じあうための手段であることを「聞き書き甲子園」は教えてくれます。近年、「聞き書き」は、ESD（持続可能な開発のための教育）やアクティブラーニングの手法のひとつとしても評価されるようになり、高校や大学の授業にも取り入れられようになりました。教育としての「聞き書き」の可能性を、「聞き書き甲子園」の事例から紹介します。

2002年（平成14年）から始まった「聞き書き甲子園」は、毎年100人の高校生が、森・川・海の「名人」100人を訪ね、一対一の対話を通じて、その知恵や技術、ものの考え方や生き方を「聞き書き」し、記録する活動です。

「話し手」となる「名人」は、農林水産省が、それぞれの分野の関連団体を通じて選定を行っています。一方、「聞き書き」をする高校生は、文部科学省が全国の高等学校に呼びかけて募集を行っています。プログラムの運営はNPO法人共存の森ネットワークが主体となり、株式会社ファミリーマートをはじめとする民間企業や団体の協賛・協力ならびに日本財団の助成を得て、実施しています。

「名人」は、造林手、炭焼き、船大工、漁師、海女など、自然と関わりあう仕事をもち、先人から

の知恵や技術を受け継いできた人たちです。一方、「聞き書き」に参加する高校生の多くは都会で暮らしています。自然に対する憧れはあっても、そこで生きるための術（すべ）を持たない。そんな彼らが、初対面の名人を訪ねて、一人で「聞き書き」に出かけます。

「聞き書き」の基本は、「聞く」という行為です。双方向のやりとり＝「対話」によって成り立ちます。高校生がどのような質問を投げかけたのか。どれだけ丁寧に、質問を重ねていったかによって、「対話」の方向性や深さ、質は変わります。何より、「聞き手」と「話し手」がお互いに心を開かなければ、「対話」は成立しません。

「聞き書き甲子園」では、「聞き手」は高校生。「話し手」は主に60代から80代の方、つまり高校生の祖父母にあたる世代です。生まれ育った環境や世代の違いを乗り越えて、両者は出会います。孫のような高校生だからこそ、名人も丁寧に話をしてくれることもあるでしょう。「聞き書き」は、そんな二人のあたたかいコミュニケーションの賜物なのです。

近年、日本では、インターネットや携帯電話、テレビゲームなどに夢中になり、

人とコミュニケーションをとることが苦手だという若者が増えています。また、社会のさまざまな課題は、教科書やテレビの情報番組などを通じて知り、学ぶことがほとんどです。

名人を訪ね、その地域の自然や風土を感じ、その人が働く現場を見て話を聞くことは、とても貴重な体験です。高校生は、「聞く」ことを通じて、農山漁村のさまざまな課題を、より身近なものとして感じ、社会との具体的な接点をもつことができるのです。たとえば長年、漁業を続けてきた名人に話を聞けば、季節ごとの海の変化や魚の群れの探し方を教えてくれるでしょう。海で働くことの誇りや喜び、厳しさと同時に、跡を継いでくれるはずの息子が都会で暮らしていることの寂しさについて打ち明けてくれるかもしれません。高校生は、名人が語る「物語」に自分自身を重ね合わせながら、働くこと、生きること、そして人生がもつ意味について考えを巡らせます。

「聞き書き」から得るもの

「聞き書き」では、対話はすべて録音し、それを書き起こす作業を行います。録音テープを再生し、止めては、書き起こす。高校生は、名人の言葉を何度も繰り返し、反芻します。その過程で高校生は、対話の場面では、聞き流してしまっていた言葉に気づくこともあるかもしれません。「これが名人の言いたいことだったのだ」と改めて思い至ることもあるでしょう。書き起こしは大変手間のかかる作業ですが、実は「話し手」への理解を深め、思いを重ね合わせるためにも大切な作業なのです。

ある高校生は言いました。「名人の言いたいことが、いつの間にか、自分の言いたいことになってきた。この不思議な感覚は、聞き書きでしか味わうことはできない」と。つまり高校生は、名人の言葉だけではなく、その息づかいや体温や存在感……。そういったものすべてを丸ごと受けとめ、お互いの感覚を重ね合わせながら、言葉を紡いでいくとい

う貴重な体験と実感を得たのです。

一方、「名人」の中には「自分の人生について、人に話するのは初めてだった」という人も少なくありません。「自分がやってきたことは、特段褒められるようなこ

とでもないし、当たり前のことではしかない。人に話す価値などないと思っていたけれども、高校生に話すうちに、自分の人生も無駄ではなかったと思えた」と語ってくださった「名人」もいます。「聞き書き」は、このような二人の関係性を通じて、「個の尊厳」を取り戻す作業でもあるのです。

「聞き書き」で育った若者たち

「聞き書き甲子園」が始まって16年。高校生による「聞き書き」は、もうすぐ1600人を超えようとしています。この膨大な記録は、自然とともに生きてきた日本人の知恵や技術の貴重なアーカイブです。NPO法人共存の森ネットワークでは、これらの「聞き書き」作品を冊子にまとめるとともに、インターネット上の電子図書館でも公開しています。同時に、「聞き書き甲子園」の取組は、「記録だけ」に留まりませんでした。「森が泣いている」、「ムラが寂しくなった」と語る名人の言葉に心動かされた高校生たちは、日本各地の農山漁村に入って、里山整備や棚田の保全、藻場の再生活動などに取り組むようになりました。毎年参加する高校生の「聞き書き研修」も、かつて「聞き書き」を経験したことがある、大学生が毎年サポートしています。



聞き書き甲子園 開催スケジュール（平成29年度の場合）

6月末 ● 応募申し込み締切

- ・参加申込書と応募動機の作文を事務局に提出します。

7月下旬 ● 参加者決定

- ・応募者の中から100人の高校生を選考します。

8月11～14日 ● 事前研修会（東京）

- ・北海道から沖縄まで、全国から参加する仲間が一同に集まります。
- ・講師の塩野米松先生から「聞き書き」の手法を学びます。
- ・グループでインタビューし、作品をまとめる練習を行います。
- ・プロのカメラマンから、写真撮影の仕方を学びます。
- ・森の中での体験活動などを通して、「名人」の知恵や技を学びます。
- ・先輩の体験談を聞いて、秋からの取材に備えます。

8月下旬 ● 取材する「名人」を決定

- ・全国から推薦された森・川・海の「名人」の選定表彰が行われます。
- ・「名人」と、取材する高校生の組み合わせが決まります。

9月～12月 ● 「名人」への取材（原則として2回取材）

- ・「名人」に連絡し、取材する日時を決めます。
- ・原則として2回、「名人」を訪問し、インタビューを行います。
- ・インタビューを録音したデータは、すべて書き起こします。
- ・書き起こした文章を整理し、作品にまとめます。
- ・できあがった作品は必ず「名人」に読んでもらい、確認をとります。

1月初旬 ● 聞き書き作品を提出

- ・完成した作品は、事務局に提出します。

3月 ● フォーラム開催（東京）

- ・「聞き書き」の成果を発表するフォーラムを開催します。
- ・代表高校生と「名人」による発表のほか、振り返りのワークショップを行います。
- ・作品は、冊子にまとめ、インターネット上の「聞き書き電子図書館」でも公開します。

「聞き書き」の How to

“塩野流” 聞き書き術



高校生と「名人」による、1対1の「聞き書き」と、その作品のまとめ方は、「聞き書き甲子園」がはじめた当初から、作家の塩野米松先生に指導をいただいています。「聞き書き」の基本を理解いただくために、その講義の全文を紹介します。

1 『聞き書き』の魅力

◆—— 通常ではあまり話さない人と深く話せる

皆さんは同世代の人たちとは話をするでしょうけれど、自分たちの先輩とか、お父さん、おじいさんの世代の人たちと話をすることはなかなかないと思います。僕も自分の親とは話をしづらいし、ちょっと話しただけでも、なぜかすぐ腹が立ってしまって話を聞くことができない。けれども、よその年上の方から話を聞くとすると、けっこう素直に聞けるものです。

本来、初めて会った人に「お子さんは何人いらっしゃいますか」、「仕事の上でどんな失敗をしたことがありますか」なんていうことは、なかなか聞けるものではないのですが、聞き書きの面白さのひとつは、インタビューという形式をとりながら、初対面の方や世代の違う方にいろいろな話を聞くことができることです。

◆—— 民俗学の資料に匹敵

『聞き書き』によってまとめた文章は、正確な内容に仕上げると、民俗学の資料としても使えるような価値のあるものにもなります。たとえば職人はみんな同じものを食べたり着たりしているように思われているけれども、それぞれの職業に合った食べ物、着る物、身のこなしがある。こうしたことをひとつ

ずつ正確に聞いて書きとっていくことで、民俗学の資料としても価値のあるものになるのです。

だから、聞き書きの作業は、日常に埋もれてしまいうような、その人の生活や考え方、仕事のことなどを聞き出し、正確に書き写す力とその心構えが大切です。

◆—— 聞き手の人生を反映する文芸

『聞き書き』は『語り』とは違います。『語り』は、こちらが聞かないでも、ずっと一方的に喋っている。「落語」がそれに近い。それを録音して文章に書き起こしても『聞き書き』とはいわない。これは、小説家が小説を書くのと同じように、語り部が自分の意志だけで自分の人生などを皆さんに話しているのです。

一方、『聞き書き』は相手に質問をして話してもらいますから、そこには聞き手の意志が反映されます。何を聞くか。そして返ってきた答えに対して、次はどういう質問を続けて聞くのか。それによって相手の答えも変わっていきます。だから『聞き書き』でまとめた文章は、一見、話し手の人生のように見えますけれども、実は聞き手の人生も映している文芸形式なのです。

たとえば、同じ人に幾人かの人が『聞き書き』をしたとしても、それぞれの聞き手の個性によってまったく違う『聞き書き』が出来上がります。

皆さんのようにまったくまっさらな状態で行った

『聞き書き』は、僕がやる『聞き書き』とはまったく違うと思います。「この人は何も知らないからこういう質問をしているんだろう」「細かな話をしてもわからないかもしれないから、わかりやすく大きく答えておこう」という具合に答えてくださる話も聞き手の要領次第で変わってきます。では、そういう『聞き書き』が素人だから役に立たないかというと、そういうことはありません。皆さんがまとめた『聞き書き』の読者には、皆さんと同じように何も知らない人たちがいます。その何も知らない人に、その人の仕事をどう紹介すればわかりやすいか、という時に、皆さんの率直な質問の方がより有効かもしれないのです。

そして何より、大事なことはこの『聞き書き』を完成させることで、聞き手の皆さんの今の姿がそのまま映った文芸作品ができ上がるのです。そういう意味で、僕は話を聞く人はリトマス試験紙のようなものだと思っています。年齢の違う人たちが同じ人に同じようにインタビューをしてまとめても、違うものが出てくるでしょう。それがとても大事なのです。

◆—— 相手の人生が職業を通じて浮かび上がる

石垣を組む職人さんに石の組み方という「技術」について話を聞いて文章にまとめても、実はなかなか伝わらないものです。もし「技術」だけを記録するのであれば、文章よりも映像（ビデオなど）を使った方がいい。しかし一方で、彼の「生き方」は「技術」の話を聞くことを通じてでないとなかなか見えきません。これはどういうことかという、たとえば、船大工は僕たちから見ればひとつの職業だけれども、彼と彼の家族から見れば「船大工という生き方」なんです。だから船をつくる作業工程を聞く中でその人の職業を知り、その人の「船大工という生き方」を浮かび上がらせていくというのが、実は『聞き書き』の最大の仕事なのです。文字をもって、「その人の職業を通じて人生を浮かび上がらせる」という作業を文芸といいます。ここまで『聞き書き』

ができあがれば、その作品は文芸と言えます。

さらに、話し言葉で書くので、上手にまとめればとても読みやすく、また、その人の人柄や生まれ育った背景、さらには人生の裏側まで読み取ることができるものに仕上げられるのです。

◆—— 他のノンフィクションとの違い

人にものを聞いたり、観察して表現していく「ノンフィクション」の形式には、『聞き書き』以外にもいろいろあります。

通常ルポライターと称する人たちは、同じように話を聞きに行って、自分の言葉でまとめます。相手が喋った言葉を使う時にはカギカッコ（「 」）を使い、それをつないでいく地の文章は自分の言葉で書きます。カギカッコ（「 」）中には、基本的に相手の人が喋った通りの言葉を入れて、嘘をついたり、言い方を変えてはいけない、というのが「ルポルタージュ」の基本です。しかし、ルポライターは自分の意志と考えをもって、たとえば、その事件の当事者や周囲の人に話を聞いていきます。

基本的な文章のまとめ方は、聞き手であり、ルポライターである彼が、彼の意志で書くというものです。相手の意志や聞き手の意志が文章に表れるという点は『聞き書き』と共通していますが、表現の方法としてはまったく違うものです。

その他、『エッセイ』という形式もあります。日本の場合は、取材した事実を元に、自分の感情を写し取ったような形で文章に表現したものをエッセイと読んでいることが多いようです。

他に『自叙伝』もしくは『伝記』という形式があります。『自叙伝』は自分で書くもの、『伝記』は他の人が調べて書くものです。欧米の伝記作家の場合は、その人の個人的な手紙まで見せてもらったり関係者の証言を集めたり、膨大な資料を元に伝記を書き上げます。

『聞き書き』はこうした方法とは異なったやり方です。相手に話を聞きながら、その話し手の言葉だけで文章をまとめていきます。こういう形式は世界

でもなかなか珍しい。

2 『聞き書き』を行う準備

◆—— 心構え…話し手に心を開いてもらうために、その人を尊重・尊敬する姿勢を持つ

これから相手の方と初めて会って話す時に何が一番大事かというと、まず自分のことをわかってもらうことです。そうしないと、相手は心を開くことができません。これは普段の会話や人との付き合いでも同じです。相手がどんな人かわからないのでは、話のしようがないのです。

では、自分のことをわかってもらうためにはどうしたらいいでしょうか。それは、まず相手を尊敬することです。たとえば、その人がおじいさんであれば「その歳までひとつの職業を続けて生きてきた」というそのことだけでもすごいと思いますし、その上、僕のような者に、自分の人生を話してもいいよと言ってくださっていること自体がすごいことだと思うのです。そういう敬意をこめた態度で『聞き書き』に臨むことで、相手の方も心を開いて話してもいいかなと思ってくれるものなのです。

◆—— 勉強と準備

①その人のことをよく勉強して知る

話を聞きに行く前には、できるだけ相手のことを知っておくようにします。特にその人の職業についてほとんど初めて聞くことになる場合、たとえば石垣を積む職人さんに話を聞きに行くことになったとします。その場合、「石垣ってどんなものだろう」と図書館やインターネットを使って調べる。そうすると、石垣を積むには「ゲンノウ」とか「ノミ」という道具があるとか、その道具は地方によって呼び方も形も違うとか、石を組んで石垣を作ることは、今は法律上規制されていて出来ないから石垣の裏側にコンクリートが塗ってあるとか、いろいろなことが調べた中でわかってくる。たとえ、そういうことだけでも、わかる範囲のことは調べてから話を聞き

に行った方がいい。なぜかというと、聞き手が何も知らなすぎると、話し手は相手との会話に興味を持たなくなるからです。『聞き書き』の内容も薄っぺらなものになってしまうのです。

②質問を用意していく

皆さんははじめて『聞き書き』をする人がほとんどだと思いますから、質問事項のリストは用意して行った方が良いでしょう。質問事項はいろいろなことを想定しながらつくります。自分が文章にまとめるならば、これだけの質問がいるというものを考えておきます。

その人が何年生まれで、生まれた環境はどうだったか。その人の仕事はどんな材料を使って、どんなふうに物を作るのか。または育てるのか。道具は、その技を身につける方法は。さまざま聞くことがあります。

ただ質問を並べても、相手からの返事が「はい」とか「違います」というだけだと文章にはなりません。できるだけ質問に対して具体的に話してもらわなければならない。

質問事項を考えていきますが、相手の答え次第では、新たな質問を追加しなければなりません。

話をしながらいろいろな事を考え、返事をしてもらった中身に疑問があればすぐにメモを取り、それをまたタイミングよく質問していきます。しかし、上手に聞こうと思ってもなかなか難しいことでしょう。自分のありのままを相手にぶつけて、相手のありのままの答えを引き出す。そのためには、こう聞いてこう答えたら次にこういう質問をしようとか、はじめは、ある程度、作戦がいるかもしれません。さらに、インタビューの最中に一番困るのは、お互いが黙ってしまうことです。たぶん、相手は何を話したらいいか戸惑っているのでしょう。そのときは相手が話さなくても、聞き手が話をしなければなりません。自分のこと、家庭のこと、学校のこと、祖父母のこと、場を保ち話し手が心を開きやすくします。こうした事態に対応するのはテクニックではなく、皆さんの真摯な態度と一所懸命さです。

◆—— 録音を確実に行うための用意

① 自分の録音機の確認

録音機の使い方はあらかじめ確認しておきましょう。マイクの向きにも注意をしましょう。ご自身の録音機の使い方や特性をよく知った上で、マイクを置く位置などにも気をつけてください。

② 録音できているかどうかを確認する

インタビューが始まってから録音ができているかを確認するのは難しいです。事前に自分の声を録音して練習しておきましょう。また、可能であれば、取材の前に試しで録音してもらい、音が録音されていることを確認してから、話をはじめてみましょう。

③ 録音は途中で止めない

できるだけ録音しましょう。無駄なようでもふたりに話をしている間はずっと録音し続けてください。お茶が出て「まずひと休みしなさいよ」と言われても録音は続ける。この時に録音を止めてしまうと、いつのまにか話に夢中になって、気がついた時には録音していないということがよくあります。また茶飲み話の間や移動中に、大事な話をしてくださることがよくあるのです。

④ 持ち物リスト

録音機（中に新しい電池をセットしておく）、電池の予備、メモ用のノート、筆記用具、カメラ、カメラ用の電池は必ず用意します。また、仕事現場を見せてくれることもあると思うので、動きやすい服装で行きましょう。

3 まず相手の人に伝えること

① 『聞き書き』とはどういうものであるかを伝える

② 録音させてもらうことの了解を得る

③ 原稿はご本人に確認し、不都合があれば修正・削除できることを伝える

まず皆さんは『聞き書き』をする相手の方の家に伺って、挨拶をしますね。簡単な自己紹介をして、「こ

れから『聞き書き』をさせてください」とお願いします。でも、相手の方は『聞き書き』とはどういうものかを知りません。ですから、『聞き書き』とはどういうものかということを説明しなければなりません。「これからお話ししてくださる中身を文章にまとめます。私が質問をして、お話いただいた言葉を書き起こし、それを文章にまとめます」というようなことを、まず説明します。

そして、録音機を出す時に、「申し訳ありませんが、録音させてください」とことわる。何のことわりもなしに録音をするのは相手の方に失礼なことで、ルール違反なのです。また、録音してしまえば、それは自分のもののような気がしますが、そこで話された言葉は相手の方のものです。だから、はじめに相手の方にも、話した言葉がすべて録音されることを覚悟してもらわなければいけない。さらに話す途中で、相手の方は「こんなことまで話して良いかな」とためらう場合がありますので、「最後にまとめた原稿をお見せします。もし不都合なところがあれば、あとから削ってくださって結構です」もしくは、「最後に原稿を整理する段階で、ご相談させてください」といっておきます。こうしたやり取りをきちんとしないと、いずれにしても相手の方に信用されず、本当のことを話してくれないものです。

4 聞く

◆—— 『聞き書き』は対話でできあがる

『聞き書き』というと、「聞く」という言葉のイメージで、どうしても相手の方に一方的に質問する形式に聞こえますが、実はお互いの「対話」なのです。お茶飲み話の延長で、話をずっと聞いていく。だから相手ももちろん話しますが、僕もただ聞いているだけではなく、話をします。2人で話をしながら対話形式でずっと物語が進行して、時々、話の流れが元に戻ったりしながら、いろいろな話をしていく。人というのは、話をする中でしか思い出さないことがたくさんあるのです。また、話をしているうちに

自分の考えがまとまるということがあるのです。皆さんが聞きに行く相手は、答えをはじめから用意して待っているわけではないのです。皆さんが話しかけることによって答えを見つけたり、「ああ、そういう言い方があるのか。それならこういうふうに言う場合もあるんだよ」というような、表現をみつけてくださる。

こちらから話しかけない限り、向こうから答えは返ってきません。自分が話をすることで、相手の言葉を聞き出していき、これが単純なインタビューと違って、『聞き書き』のとても面白いところなのです。

◆—— 相手の人が当たり前だと思っていることを聞き出す

インターネットや図書館で調べれば、自分が知りたいことはだいたいわかります。けれども、自分が相手の方に質問して、はじめてわかることもあります。僕は、自分で本を書くために『聞き書き』をしますが、そのときには、どこの資料にもなかったことを聞くようにしています。それは、本には書いてなくても、たとえばその職人さんにとっては日常の、当たり前のことだったりもするわけです。

『聞き書き』で大切なのは、相手の方が当たり前だと思っていることを上手に聞き出すことです。自分が今まで本で見た、どの川船の写真よりも、この熊野川の船は変わっている。平たくて、幅が広い。これはなぜなのか。たとえば、そういう質問をします。相手の方にとって自分の船だけが自分の人生ですから、それを当たり前だと思っている。聞き手の事前の勉強による質問を受けない限り、その人自身からは、その疑問に対する答えは出てこないのです。

◆—— 最初に用意した質問を基本として、さらに相手の話の中から新たな質問を作り出す

「質問事項のリストを用意して行った方がいい」とお話ししました。しかし実際には、その用意した質問だけだったら、30分もかからないうちにインタビューは終わってしまうでしょう。だから聞かな

ければいけないと思うことをまず基本に置いて、後は相手の答えの中から、その場で質問事項を作り出していくのです。

たとえば、大工さんに「どういうふうにすると、カンナを上手にかけられますか」と質問してみる。「自分の腰の幅に足を広げるのがいい」とか、「右足を半歩踏み出すのがいい。これがカンナを削るのに一番疲れないやり方だ」という返事が返ってきます。その話を聞いたら、その場で、さらに質問を足します。たとえば、「それは誰に教わったのですか？」と聞いてみる。そうすると「自分のお師匠さんに教わりました。お師匠さんは、自分が前かがみになってカンナを削っていると、必ず箸の柄でひっぱたい」と話してくれる。その答えを受けて、また次の質問をします。「ひっぱたかれた時、どう思ったのですか」と聞いてみる。「非常に腹が立ったけども、お師匠さんの言うことだから仕方なく、その通りにやった。今までずっとそれでやってきた。だけど、自分が弟子を持つようになって初めてお師匠さんが殴った理由がわかったよ」という会話をずっと繰り返していくと、カンナのかけ方を聞きながら、その大工さんの師弟関係がわかるようになります。そして、話を聞くうちに「お師匠さんは別に先生じゃないし、弟子から授業料をもらって教えてるわけじゃない。むしろお師匠さんは弟子に小遣いという形で賃金を払っている。その上、技術を教えてくれる。徒弟制度の中で殴られたり蹴られたりすることは、僕らが思っているほど嫌なことではないのかも知れない……」といったことに気づくのです。このようにひとつの動作や技術の中からどれだけの話を聞き出していけるかが、『聞き書き』の大事なところなのです。

このように話すと、とても難しそうに聞こえるかも知れませんが、でも、やってみればわかることです。その人のところに行って、話を聞きながら疑問に思ったことを積み重ねていく。そうすれば、僕が今、説明しているようなことに必ず行き着くのです。

◆—— 核心に近い部分は、聞き方を変えて何度も聞き直す

僕は自分で『聞き書き』をしながら思うのですが、僕がもし刑事であれば供述書も上手にとれるのではないかと思います。『聞き書き』という作業の核心は、尋問調書をとるのと、たぶん似ているだろうと思うのです。僕が質問をすると相手からは答えが返ってきますが、その答えでは満足できないことがよくあります。どこか納得できない。そうするとその都度、聞き方を変えて、何度も質問を繰り返しながら、同じことを聞く。そして、疑問に思うことが出てくると、また聞く。さっきはこう言ったけれど、自分が今まで読んできた資料ではそんなことは書いていなかったから、もう一度、聞いてみようと思う。何度も聞いて、問題の核心に近い部分を引き出していくのです。

◆—— 録音機に頼らないでメモをとる・疑問はメモに取りタイミングよく質問する

相手の言葉でわからなかった言葉は、次に聞くためにメモをとります。録音機だけに頼ると、だんだん相手の言葉を聞かなくなるものです。そのためにも最初からノートを広げて話をメモしていくのが後々の作業としては一番楽です。書き、メモすることで、相手の言葉をできるだけ頭に記憶した方がいいのです。キーワードを記憶し、次の質問に挟み込むことで、相手の反応も変わってきます。

僕はよく野山を歩きますが、初めて野山を歩いて自然観察する人たちに「カメラは使うな」といいます。それは、写真の中に記憶したものは、自分の頭の中に記憶されているわけではないからです。後で写真を見ればわかるだろうと思うでしょうけれど、自然観察する基本的な力を持ってない人がどこをどう見ればいいのかわからない状態で写真を見ても、結局それは写っているだけということになってしまいます。それだったら、その場でスケッチをした方がいい。メモをとった方がいいのです。

そうすれば、どこから葉が出ているのか、花び

らは何枚あるのか、細かなことが見えてくるのです。録音機やカメラといった機械に頼りすぎると、後々にまとめる作業が大変になります。

そうは言っても、実際にインタビューすると相手の話に没頭してメモを怠ったり、「今の話は後でもう1回テープを聞けばいいや」と思うようになってしまうことがあります。そういうことはきつと後で後悔する原因になります。特に、メモするときに大事なものは、その場で気がついた疑問をメモすることです。そして、その疑問は、相手の話の流れを損なわないように、タイミングよく質問するようにします。

少し高度な技術ですが、後から話の内容を思い出せるならメモを取らないというのが本当は一番いいのです。聞き手は話し手のひとつひとつの動作に注意深く気を遣っているので、何か話した言葉を僕がメモを取りますと、「あ、そういうことを話せばいいんだ」と向こうは思う。もしくは、「今メモを取ったけど、どういうことでメモを取ったんだろうか」とも思ったりするのです。だから道端で会ったり、お茶を飲みながら話してるように話せるなら、本当はそれが一番いい。そのために、録音機を置いたときも、相手に録音することの了解を得たら、録音しているということはできるだけ忘れてもらうように話をするのが一番望ましい。これもなかなか難しいのですが……。

5 たくさんのわからない言葉

◆—— その職業独特の用語は重要。話を聞き出すキーとしてどんどん質問していこう

たとえば職人さんに話を聞きますと、わからない言葉がたくさん出てきます。道具の名前、木の種類、ひとつひとつの単位、恐らく皆さんにとってはすべて初めて聞く名前だと思います。それを、ひとつひとつ確認していかなければいけません。

たとえば石工さんの場合でいうと、石を打つためのカナヅチがあって、そのカナヅチに使う「柄」(え)

があります。この「柄」は職業によって全部違います。地方によっても違います。自分の体に一番負担がなくて、折れなくて、長持ちして、手になじんで、汗をかいても手から滑り落ちない、そういう木を使います。しかもそれは、自分たちの一番身近にある木でなければいけないのです。遠くから買ったり、道具屋さんに行って買ってくるようでは、すぐに修理して使えないからです。ですからインタビューでは「その使っている道具の柄は何ですか」と聞いて、その木の名前を覚えて、「なぜその木を使っているのですか」とまた聞く。こうした質問を繰り返していきます。

木には年輪があります。真中の方は赤くて外側は白い。林業高校とか、農業高校の人たちはそういうことを授業で教わったり、実習で見ているかも知れない。でも普通高校の人はそういうことを知らない人が多いと思う。白いところの木を使ってつくる道具、赤いところの木を使ってつくる道具があります。年輪の中心の所は舟には使いませんが、それも質問をすれば答えてくれると思います。「なぜその白いところを使わないんですか」、「これは腐りやすいからだ」、「じゃあ、なぜ芯の赤いところは使わないんですか」、「ひびが入るからです」、「では舟はどこの部分を使って造るのですか」。こういう話のやり取りをすることが大切です。

たとえば鍛冶屋さんが刀をつくろうとしているとします。炉の中を覗いて、「これは何度でしょうか。」と聞くと、よく勉強をしている鍛冶屋さんは「725度という臨界点がありまして、その温度を超えることを目指してますので、今は725度よりやや上がったところだと思います」という言い方をしてくれる。しかし、これは本来の鍛冶屋さんの言い方ではありません。鍛冶屋さんは炎の色を見て温度を推測している。だから、夕焼けの色ではまだ低くて、もう少し明るく白みがかってきた時には725度を超えているという基準を持っているのです。炎を使う職人たちは計測機器を使うことはまずありません。これは炭焼きも、焼き物屋さんも、皆そうです。そ

の焼き物屋さんが考える温度の基準、それを焼き物屋さんが使う言葉で聞き出せるかどうか、それが『聞き書き』を成功させるコツです。

◆—— 自分の中の常識や想像を疑う

① 嘘を書かないためにも、具体的にモノを見せてもらって目で確認する

年配の大工さんや石屋さん、桶屋さんは、長さを言うのにセンチとかメートルという単位は使わずに、一尺とか何分といった「尺貫法」を使います。なぜかという、昔から自分の体を物指しにして馴染んだ言い方で、その方が使いやすいからです。

たとえば「2分の釘を使います」という話があったとします。僕らの頭の中では、釘は鉄でできていると思い込んでいるかもしれない。そして、平らな頭のついた釘だといわれたとたんに、普段見る釘を思い浮かべるかも知れません。でも、実はこれは、鉄の釘ではなくて、竹でつくった釘かも知れません。そういう勘違いはいくらでもあるのです。しかも、舟をつくる時の釘も、宮大工さんが五重塔をつくる時の釘も、僕たちがすぐに思い浮かべる形の鉄の釘は1本も使われません。頭の中でわかったつもりになってしまうと、肝心なことを聞いて確認してくることを忘れてしまう。そうすると、僕たちが「常識」だと思って「はい、はい」と聞いてきたことが、原稿に書き上げた時には「嘘」になってしまうことがあるのです。

また、話の中では「あれ」「これ」と言っているあいまいな言葉も、文章にまとめるときには具体的な言葉に置き換えなければなりません。たとえば、目の前に道具を持ってきてもらって話をする時に、相手の方が「この道具はね……」と言ったとします。文章にするときには「この道具」では読者にわかってもらえないので、この、の後に名前をきちっと聞いて、たとえば「このゲンノウは……」に置き換えます。「長さは、こんなもんだな」と言った時にも、ざっと見て30センチであれば「30センチ」と自分のノートにメモしておきます。そして、文章に書く

時には具体的な数字を入れる。そういうことにも注意しながら『聞き書き』をしていきます。

そのためにも、話の途中で、仕事場や使っている道具、出来上がった品物、材料などは、できるだけ実際に見せていただきましょう。そしてそれをきちんとメモに取ります。もちろん写真を撮ってもいいのですが、先ほど言いましたように写真だけでは、見落としてしまうこともあるかもしれないので、きちんとメモにもとります。そして、職人さんそれぞれに呼び方があるので、それをどう呼んでいるのかも聞きます。たとえば、木一本持ってきてそれを使う時に僕たちは根元の方を「根元」、先端を「先端」と普通に言っていますが、職人さんは根元を「モト」、先端のことを「ウラ」と言ったりもします。あるいは「日面」（ひおもて）、「日裏」（ひうら）という言葉もあります。日が当たる側と日が当たらない側という意味で、それによって木の性質が違うのです。一本の木を使う場合にも、どこの部分を使うのか。なぜそうするのか。そういうことも、できれば具体的な物を見せてもらったり、紙に絵を描いてもらうようにします。

② 相手の頭の中にあるモノの形は、絵や図面などを描いてもらって確認する

岡山の舟大工さんに話を聞いたときに、こんなことがありました。ここでは、舟をつくるときに、木を合理的に使うため、ねじったような製材の仕方をします。この舟大工さんは設計図も何も描きません。その川に合わせた舟を先祖代々造ってきているのです。だから、長さがいくつの舟が欲しいと言えば、もう彼の頭の中には、「じゃあ舳先の方はいくつで、真中はいくつで……」という具体的な形が思い描けるのです。だから設計図は書かないのです。でも、僕はその頭の中にあるものをわかりたいから、あえてその設計図を描いてもらえないかと相談しました。ところが彼は今まで設計図を描いたことがないわけですから、立面図だとか平面図という書き方を知らない。そこで、代わりに紙を切って、舟の形

に貼り合わせ、それを開いたものを僕に渡してくれました。それによって、僕は話に聞いていたことを断然よく理解できました。材のどこがどうねじれているのかも、その紙を見せてもらった時に初めてわかった。同じように、他の方に話を聞いた時に、「ねじって製材をする」ということがわからなかったので、粘土を使って説明してもらったことがあります。相手の話をより理解するためには、絵を描いてもらったり、模型をつくってもらったり、さまざまな工夫が必要です。

◆—— よくある困った状況への対応

① 人生論よりも具体的なできごとの積み重ねが重要

相手の方がご自身の「人生論」を語ってくれることもあると思います。でも、「人間というのは、こういうもんだよ」とか、「人が生きるというのはこういうもんだよ」というような、ありきたりの言い方をされても、読者は面白くありません。その言葉の中味を示す具体的なディテールが欲しいのです。

『聞き書き』の基本は、ディテールを積み重ねていくことです。「その人の人生がどうだったか」ということは、ディテールを積み重ねた中で初めてわかるのです。たとえば石工さんの所に行って、なぜ石工さんになったのか、お父さんも石工さんだったのか、誰に仕事を教わったのか、何年教わったのか、最初にやった仕事は何だったか。そういうことを具体的に聞いて、ひとつひとつを積み重ねていく中から、その人の人生が浮かび上がってくるのです。

② お付き合いで聞かざるをえない話もある・話を元に戻す

『聞き書き』をしていくと、とにかく話は横道にそれます。子ども時代の話を知っているのに、今の話になったりする。これは仕方ありません。これを聞かないと先に進まないの、とにかく相手の話を聞くのです。そして、しばらく経ってから、「あの、先ほどの、小学校5年生の時のことですが、その時はどうしたんですって？」というように話を何度

も戻してあげる。

原稿を仕上げるためには、この話の道筋をたどらなければということを忘れないようにしておかないと、後で原稿をまとめる時にどうしようもなくなります。「小学校5年生の時に、おやじに炭焼き窯に連れて行ってもらった。それが初めて作業を手伝った体験だ」という話があったとします。では、その後、お父さんに何を教えてもらって、どういうふうに炭焼きの仕事を覚えて行ったのか、と聞きたいのに、話は横道にそれて、「小学校5年の時は遠足で和歌山に遊びに行って、お城を見た」という話になったりするのです。あるいは、「隣のおじいちゃんが炭焼きの名人だったんだけど、趣味は将棋でね。その将棋の相手をよくしていたよ」という話になったりする。話は本題からずれていますから、「その話は結構です」と言いたいところですが、これはお付き合いですから仕方ないのです。相手の話を聞くようにします。そのためにも、録音テープは余分に持っていく必要があります。万が一テープが残り少なくなると、途中から話が上の空になる。それは相手への返事にもすぐに表れます。とにかく我慢して聞いて、しばらくしてから「ありがとうございました。それで、初めてお父さんに炭焼き窯に連れて行ってもらった時の話に戻りますけれども……」と相手の話を誘導します。

③「事実ではないこと」や「謙遜」を乗り越えて、本心にせまろう

『聞き書き』には欠点があります。ひとつは、相手の方が本当のことを言っているかどうかかわからない、ということです。もうひとつは、日本人の場合はほとんどがそうですが、自分のことを誉めることを嫌う、ということです。僕たちがいかにその人を尊敬して彼のすばらしいところを紹介したいと思って話を聞いていても、彼の言葉には自分を謙遜する言葉は出てきても、誉める言葉は出てこない。逆に、「自分が日本一だと思います」というような発言をする人がもし僕のインタビューの対象であれば、僕

は途中から彼を尊敬できなくなるかもしれません。「その人の本心にいかに迫るか」ということも、『聞き書き』の面白さのひとつです。

6 まとめる ～読みやすく、人柄が良く見え、 人生の裏側まで読み取れるものに～

『聞き書き』は「文学」という分野ではなくて、「文芸」というひとつ、芸を持った仕事だと僕は思っています。その芸とは、まず「話を聞く」こと、それからその「話をまとめること」、このふたつです。

では、ふたつめの「話をまとめる」ことについて説明しましょう。

◆—— 書き起こしは時間がかかる大仕事

録音の書き起こしは、時間のかかる作業です。録音時間1分で、だいたい原稿用紙1枚の文字数になります。だから1時間、『聞き書き』した録音を起こすと、原稿用紙60枚分になる。僕が1時間で書ける量は5～6枚。ですから1時間のテープを起こすというのは大変な作業なのです。僕はプロの方に書き起こしを依頼しますが、2時間半のインタビューの録音を午前中に渡して特急で仕上げていただいても、原稿が上がってくるのは翌日の夜8時頃になることもあります。それほど時間がかかるものなのです。話している言葉を文字に書き起こすというのは大変な作業なのです。

◆—— 喋った中身を刈り取る作業＝植木屋さんと同じ作業

書き起こしが終わると、次に文章をまとめます。「小説」の場合は、自分がイメージしたものを作り上げていけばいいのですが、『聞き書き』というのは、相手の方が話したことが基本資料になりますから、皆さんがやる仕事は植木屋さんと同じく刈り取りです。もちろん刈り取った後に、自分の思っている枝を勝手に足すことはできません。だから『聞

き書き』は、上手に聞いて、上手に刈り取って、ひとつの文章に仕上げていくという作業です。

❶ いらない原稿はすべて消していく

いらない原稿はすべて消していきます。話が途中からお天気の話になったり、孫の話になったりした。そこでいらないと思われるところは削っていい。そうするだけでも、文章の量は少なくなります。

❷ 聞き手の質問はすべて消す

次に、聞き手の質問をすべて消します。そうすると残りは相手の答えだけです。質問を消していく作業をする時に、自分の質問の一部がないと相手の答えの意味が通じなくなるところがあるとします。たとえば「私はこれが大切だと思うのですが、大工さんはどう思われますか?」「その通りだと思います」といったやりとりの場合、自分の質問を残しておかないと文章になりません。その時は、大工さんの言葉として「これは大切だと思います」と書きます。また、「どんなノコギリをお使いですか」という質問を削る場合、大工さんの言葉で「ノコギリの話ですが……」とつなげる。そういう作業をしながら、まず質問事項を消していきます。

❸ 「あのう」「～だけど」など癖でくり返される言葉を削る

話言葉には「あのう……」とか、「……でね」とか、その人の癖で何度も繰り返される言葉があります。たとえば「そうなんだけど」「これはノミで削ったんだけど」というように、語尾は全部「けど」で終わる癖の人もある。そういう言葉をすべて文章に残すと、とても読みづらいものになります。この場合は、話し言葉のニュアンスを崩さないように注意しながら、文章をまとめるときに整理し、削っていきます。

◆—— 文章を変えることはどこまで許されるか？

原則① その人の人格を崩さない

原則② 言っている趣旨を曲げない

文章を整理していくと、どこまで変えていいのか、

付け加えていいのか、という問題が出てきます。これはとても難しい問題で、一字一句、絶対変えてはいけなくなると、文芸作品、読み物としてはきれいに仕上がってこない。文章を整理するときには「本人の人格を崩さない」、「話している趣旨を曲げない」というのが、まず最低の条件です。その上で、あの人が言いたかった趣旨を考えれば、この言葉に置き換えても決して間違いではないだろう、という範囲で調整していきます。

◆—— どの文字を使って表現するか

方言でインタビューに答える人もいると思います。その時に、「んじゃ」という言葉を使ったとする。「んじゃ」というのを、どう書き起こすか。文字に表すと、「んじゃ」にするべきか、「うんじゃ」とするべきなのか。一個一個の字を起こすたびに考え込みます。それから、「そうですよねえ」と言った時の「え」を起こすかどうか。原稿によっては小さいカタカナのエを入れて、それを再現している人もいます。それから「え」を起こさずに「ね」で止めてしまう人もいる。話す言葉の音の幅の広さが50音のひらがなにはあてはまらないので、それだけで皆さんは大変な苦勞をすることになります。

もうひとつ迷うのは、どこまで漢字で表現していくか、ということです。たとえば秋田の人は、背中を「へなか」と言う。それを漢字で「背中」と起こすか、「へなか」と表記するか。ただ「背中」という漢字で原稿を起こすと、そのおじいさんは標準語で喋っているようにとられてしまう。そういう『聞き書き』は、その時代の風俗や言葉遣いを表現して『聞き書き』として正しいかどうかという問題にぶつかります。あるいは、このおじいさんが喋っていた時にはもっと柔らかい感じに聞こえたのに、自分が起こした原稿を読むとぶっきらぼうに感じるのはなぜだろう、という疑問を感じることもあるかも知れません。「へなか」と書くか、「背中」と書くか。あるいは「背中」という漢字に「へなか」というルビをふるか。あるいは注をつけるのか。どういう表

記がふさわしいかを考えて、工夫してみてください。

それから、自分自身を指す言葉にもさまざまな言い方があります。「俺」「私」「僕」。そのおじいさんが話す中で興奮してくると、「わしはなー」といったりする。でも「わし」で通すとおっかないおじいさんのような印象をもたれてしまうかもしれない。その部分だけ「わし」にすればいいか、というと、そうでもありません。文章全体としてはある程度の統一をとりながら、おじいさんの性格を全体としてうまく表現するように言葉を選び、文章を仕上げなければいけない。そういう作業をするたびに、「言葉って何だろうか」と考えてみたりもします。

◆—— 話のまとまりごとに、小見出しをつけて整える

ある程度、文章を整えたら、次に話をブロック（ひとつのまとまりのある内容）ごとに整理して、たとえば「ノコギリの話」という付箋を貼るなり小見出しをつけていきます。必ずしも、話の順番通りに文章をまとめるわけではありません。「ノコギリの話」が何回かあって、その話を集めた方が良ければ、一緒にまとめます。「ノコギリの話」と「ノミの話」を比較することでノコギリの鉄の素材がわかる、というような場合には、そのふたつの話を組み合わせる。そうして、最初に作ったプロット（話の流れ）を修正し、形を整える作業をします。その過程でいらない言葉、何度も繰り返されている言葉を削っていきます。

そうして、僕が書いた原稿を本人に見てもらうと、ほとんどの人は、自分が言った通りじゃないか、と思う。でも僕はその人の原稿を仕上げるために、たぶん全体を15分の1か20分の1に削って、最初のインタビューで聞いた話と、5回目ぐらいのインタビューに聞いた話をまとめて、ひとつのブロックにし、センテンス（文章）を仕上げています。

西岡常一棟梁にインタビューして法隆寺の本を作ったときにも、棟梁は全部自分が喋ったまが書かれていると思ったでしょうけれど、僕は棟梁の話

を切ったり貼ったりしながら文章をまとめたのです。はじめのインタビューはもう今から18年ぐらい前だと思いますが、コピー機をそばに置いて1回作った原稿をコピーして、それを切り貼りして、組み合わせていく。元原稿がわからなくなると困るからすべてコピーを取って作業をしました。手で書いて、切ったり貼ったりしていくと、膨大な時間がかかります。でも今はパソコンで処理できます。パソコンには元のファイルを保存し、コピーしたファイルで何度も修正しながら上書き処理を繰り返していけば、元原稿も残るし、新しい原稿もつくることができます。

◆—— 楽しく興味がわくように工夫する、しかも事実のままで

① 並べ替え

② 頭に物語や事件をおこす

③ 面白い小見出し

さて、ここまでできたら、改めて小見出しを1枚の紙に書き並べます。それをどう並べたらその人の人生が浮かび上がってくるだろうか。子どもの時の話から時系列に修行中へとつなげた方がいいだろうか。それとも一番先に親方に怒られて失敗した時の話を持ってこようか。小説でも何でもそうですが、文章の書き出しというのは大切です。のろのろと話を始めてたのでは、読者は読んでくれない。だから最初から事件（印象的なできごと）で、物語を起こす。その事件に関心をもってもらうことで物語を展開していく、というやり方がある。『聞き書き』の文章をまとめる場合にも、そういうやり方があっていいのです。

たとえば石工が石垣を作ったり、ノミ一個で石の形を変えていく作業をどうやってやっていくのか、という話の場合、「30センチ×30センチ×1メートル80センチの石の棒を、一人で作り上げることできたら一人前です」と言われると、「あ、そうかなー」と思うと思う。マタギの人たちの話であれば「獲物をしとめた時には、『あぶらおんけんそわか』

と言って祈ります」と言うのと、「あ、そういうしき
たりがあるのか」と思って、文章を読み始めた時に
入りやすくなる。そういう作為は文芸という意味で
の『聞き書き』でいえばありえるわけです。ですか
ら、どう話の順序を並び替えればインパクトを与え
られるか。いかに面白い小見出しをつければ、読み
手を引きずり込んでいけるのか。その人の話を、興
味をもって読んでもらえるものに仕上げるというの
が、『聞き書き』の最後の仕事です。

聞いてきたことをただ書くだけでは、子どもの宿
題と一緒に。楽しく、興味をもって読んでもらえ
る、と同時に「事実」でなければいけない。語られ
る言葉は、その人らしい、その職業の人でなければ
使わないだろうという言葉が織り交ぜられ、それで
いて大工なら大工という生き方が浮かび上がってく
れば、それは大成功です。

7 原稿をその人に戻して確認する

◆——話してもらったことの重さ

「聞き書きの面白さのひとつは、初めてあった方
にいろいろな質問をして話を聞けることだ」と初め
にお話しました。これはこの職業の特権です。おじ
いさんおばあさんたちに会って話を聞いている途中
で、「これから先の話は、実は自分の子どもにも女
房にもしたことがない」と言って僕に話してくれる
ことがたくさんあるのです。そんな話を、しかも年
配の方から聞いていると、まるで「遺言」を聞いて
るような気にもなります。でも、文章には分量的な
制約がありますからその中身のすべてを僕は書くわ
けにはいきませんし、話した本人にとっても、それ
をすべて書いて果たしていいだろうか、という問
題もあるのです。ですから、『聞き書き』の場合は、
必ず出来上がった原稿を本人に読んでいただきます
。ご本人に了承をいただいて初めて、その内容を
本にし、出版することができるのです。

8 最後に

『聞き書き』の鉄則は、相手の方に精一杯の敬意
を表してお話を聞くこと。これから初めて作業する
皆さんには、ですから精一杯の努力で、頑張ってほ
しいと思います。

＊第1回 森の“聞き書き甲子園”事前研修の講義より

profile

塩野米松・しおのよねまつ

1947年、秋田県角館町（現仙北市）生まれ。
聞き書きの名手で、失われゆく伝統文化・技術
の記録に精力的に取り組んでいる。著書に「手
業に学べ」「木のいのち・木のこころ」など。

聞き書き作品例

「生きているって、感じるんだわ」

海の名人・藤本ユリ（北海道羅臼町）× 聞き手・逢坂理子（藤女子高等学校2年）

1 自己紹介

藤本ユリ。生年月日は大正15年1月3日、86歳。
職業は漁師。生まれはね、北海道の乙部村、今は乙
部町。嫁いだのは函館の古川町。子どもが2人、孫
が8人の家族だ。

漁師つつつても正しい名前は、拾い昆布漁業。9
年間旦那と昆布拾いやってたけど、俺が60歳の年
に亡くなっちゃった。そのあと余所で働いてもよ
かったんだけど、いろいろ考えて、一人でもでき
る職業だから「いや俺は昆布拾いする」つつつて、
ずうっとやってる。

2 俺、わがままな子どもだったな

今おっきくなって考えたら、子どものころはわが
ままだった。勉強は好きでねえ、というより嫌いだ。
好きなわけねえ、覚えられねえから。勉強のことは
ぜんっぜん、だめだった。ひとつつも書けね。人
から手紙をもらって、それを読むことはできるん
だけど、書くことはまったくだめなんだ。勉強嫌い
で好き勝手して、だけど、じじばばもいたったから
ね。周りみんな男の子ばっかで、俺は女の子だっ
たから、だんじだんじに（大事大事に）育ててもら
ったね。

3 農家の生まれで昆布拾いに

俺の生まれたところは農家だけど、嫁に行ったとこ

が漁師だから、そのときから漁を始めたね。その
前にも豚やってたし、鶏もやったんだけど、だめ。
借金だらけだし……。ほかにイカ漁、ウニ漁、
カニの缶詰工場に勤めたり、なんでもやった。でも
売れなかったね。そのときに昆布拾いしたの。一
人でできるっていうのもあってね。羅臼越して向
こうの赤岩の方さ行ってね、昆布拾いやったの。

4 拾い昆布漁業とは

昆布採りは、たいていの人は船、使うんだわ。船
に乗って、岸からだんだん深いところに向かって
ね。ハサミみたいなやつで挟んでねじって、からめ
てちぎるんだ。ハサミみたいなやつは昆布採り竿
っていうんだ。でも、赤岩の昆布は意外と浅いところ
にもあるから、採りやすいんでねえか。

俺の拾い昆布漁業は、岩に生えてる昆布が、ぐら
ぐらと波で揺らぐべさ。で、大きな波が来て、今度
その岩から離れて押し流されて、浜に寄ってくるわ
け。波の力でちぎれて、流れ着くんだわ。それを俺
が拾って歩くんだ。だから番屋にいて、天気が悪く
なって嵐が来て、大きな波が来ても俺はこわがら
ねえ。逆にうれしくなるんだわ。次の日に浜へ行
ったら昆布が流れてくるから。

ほかの漁師は、みんな昆布採り竿を使った方法
だ。拾い昆布やってるのは、俺一人しかいねえもん。
道具で採る権利を持ってる人はね、拾い昆布の権利
も持ってるけど、拾わねえ。たまに拾うけど、手間
のかかる作業なんだ。原始的のちゅうかな。機械も

何も使わないからよ、大変なのよ。だからみんなやらねえんだ。

5 働き場は「赤岩」

俺の働き場は赤岩ってところだ。赤岩は知床岬の突端にある浜だ。羅臼の港から船で1時間かからないくらいだな。息子か孫に舟漕いでもらって行ってる。行くのは、昔は5月だった。でも今は自分一人じゃ行かれねえから、送ってくれる周りの人間の都合いいとき。最近は7月ごろになるな。

でも、もうこれからはずっと6月に行こうと思ってる。早めに行って浜をきれいにするんだ。1年間、草をがって（刈って）ないし、流れ着いたごみを拾わねえと。あんまり遅く行くと浜直せねんだわ。きれいにした昆布を、玉砂利の上で干さなきゃなんねえのに。余所の浜から拾っても、自分の浜さ持ってくるまでに、ごみとか付いちまう。それじゃ二度手間だ。

6 何もない生活、でも住めば都

そこから、電気も水道も電話も何もない生活の始まりだよ。店もねえ、だんれも（誰も）人っ子一人来ないところだ。したけど住めば都でね、アサリはあるわ、ちっこいカニはいるわ、そんでもってウニはいるし、マスもものすごくいるし、アサリのおつゆ食べて、浜からなんでも採ってくる。ほんとにいいとこだ。自分と一緒に舟に乗ってきた米食べて生活してる。まず赤岩さ着いたら、野菜の種まいて育てるんだ。だから野菜とかは買わなくても採れる。それからたくさんの動物が会いに来て、ほんとにいいとこさあ。友達がいなくても、自然が友達だ。

たまに熊も出るな。熊出て来るったって、熊だって逃げ場なんかねんだからね。おっかねかったけど、のんきな熊ばっかしだから、あっちの熊は。どうせ走っても負けるし、棒振り回していんばってれば

（威張ってれば）、なんも熊のほうが、「なんだ、あのばばあ、全然逃げねえばばあだな」って思うからな、熊も自然にいねぐなる（いなくなる）んだわ。なんぼ熊見でもね、逃げるってことさえしなきゃええんだわ。昔目の前で、連れてきた犬がわんわん鳴いて、俺守ろうとして殺されたこともあったな。やっぱり、黙って見てるのが一番だわ。

7 あるだけ拾う、ただそれだけ

7月くらいから昆布を拾っていく。服装はカップがいつもの格好だな。濡れなくていい。あと膝まである深い長靴も使ってる。持ち物はソリ。拾った昆布をソリさ積んだら、昆布に砂付かねえべさ。ソリがなけりゃ、拾った昆布に砂付いたりする。あとは杖だな。昔拾った細いけど丈夫な木の棒があるから、その杖をついて歩いてる。

1日にこれだけ拾わなきゃならねえとかは決めてない。だから日によって採る量は変わる。落ちてるだけ拾う。8月が拾いどきだわ。

8 潮水でゆらゆらと、洗うんだ

拾った昆布は、まず汚いところとか、砂が付いてるところがあったら洗うんだ。でも雨水とかだめだ。昆布が赤くなって見た目が悪くなる。やっぱ、いい昆布ってのは真っ青な昆布なのさ。だから潮水で洗う。潮水なら色は悪くならねえ。浜辺で昆布持ってゆらゆら動かすんだ。そしたら自然と砂もごみも取れる。きれいになったら、落ちてる石をおもりとして使って、しわを伸ばしていくんだ。まっすぐなのがいい昆布だ。

9 昆布干すのは、簡単にはいかねえ

しわがきれいに伸びたら、今度は干すんだ。天気の良い日は2日で乾くんだけれど、どうしても3日干さないと、しっかり乾かない。でも、干すのもそん



玉砂利の上で乾かしているところ

な簡単にはいかねえんだ。海辺の太陽にさらして、玉砂利の上に置いて干すから、その途中で雨が降ることもある。そしたらもうその昆布はだめだ。濡れると色が悪くなる。だから天気の悪いときは、拾ったらすぐ海の中に漬けておく。漬けておけば潮水の中だから腐らないの。拾って、洗って、伸ばして、乾燥させて、まっすぐにしてやっと売りに出せるようになるけど、乾燥させるのが俺にとっちゃ一番大変だわ。

10 最近は、つらいね

何がつらいかって？ もちろん乾燥中に天気が悪くなるのも嫌だけれど、売れないことが一番つらいね。この頃は羅臼に昆布は余ってるから、俺のは、なかなか売れねえんだ。こればかりはどうしようもね。もちろんいい昆布は売れていくけど、悪い昆布

は残っていく。検査員が来て「これはだめ、あれもだめ」って言われると、悲しくなるね。根っこは食べねえから、細かく切って薬になったりする。だから一応は売れる。

11 赤岩を離れるのが、何より寂しい

昔は10月の前半までいたんだけどね、息子や孫たちが俺のこと心配だっていうんで、早くて9月後半ぐらいに帰るな。帰るときは、俺ずっと赤岩を見てしまうよ。離れるのが寂しい。俺な、赤岩さ行くたんび（度）に思う。あそこにいると、「あー、俺は生きているんだなあ」って実感するんだわ。大自然の中で、一から十まで全部一人で生活してるとね、ひとつひとつのことするたんびに、ほんとにそう思うんだ。

今まで昆布ばっかし何百枚も拾ってきたんだよ。

第2章

中学生による「聞き書き」 ——備前市立日生中学校の活動——



したからね、悪い昆布を拾ってもなんとなく愛着がわくんだわ。俺、拾うのも一人、磯上げるって一人、干すときだって一人。夜になれば暗いから、一人でランプの灯つける。屋間になれば、拾った昆布は1日で乾くわけだねから、干したり拾ったり、干したり拾ったりする。

まあ、寂しかったときもあった。でももうそれは乗り越したよ。黙々と作業してたら気にしなくなるもんさ。楽しくなってくる。赤岩にいと生きてることを実感するから、そこを離れて、うづ（家）に帰るほうが寂しくなるときもあるね。

12 やるよ、赤岩で、90歳まで

俺は90歳まで赤岩さ行く。90まで昆布拾いして、100まで生ぎるから、あどの10年間はうづ（家）にいで、ゆっくり生きる。あんまり人の世話にならないで、目立たないで暮らしていく。それがこれからの目標だ。90過ぎたら、きっと昔のことも家族のことも、なんもかんも忘れてくと思うから。だって舟乗るときも大変、降りるときも大変で、もう一人じゃどうしようもできねえもん。2人も3人も息子や孫たちに後ろに付いてもらって、ようやく舟さ乗る。波があるとこならね、舟がぐらぐらぐら動いてね、なかなかいい具合に足かけて降りるってことでできねえから。したら何べんも家族から、「来年から行かねえ方がいいかべ」って言われるけど、俺は「来年だって行くっ！」つって…。

赤岩さ来るたんびに（度に）来年の話してる。自分では何もどこも悪くないと思ってるけど、心配だって言うからねえ……。だから、90で終わり。90まで赤岩さ行って昆布拾い続けたらもう俺は満足だ。もう決めたからな。あとはみんなに迷惑かけずに、100までゆっくりするわ。

[取材日：2012年10月27日、11月17日]

【取材を終えての感想】

昆布にはこんな採り方があるのか、というのが、

名人のプロフィールを見たときの初めの感想でした。取材の時期と仕事をなさっている時期が合わず、実際に仕事をなさっている姿や、仕事の道具を拝見できなかったことは非常に残念でした。漁師という全く関わったことない職種の方とお話することとなり、初めは右も左もわからないことばかりでしたが、お話を聞いていくうちに、ユリさんが本当に赤岩での生活に誇りを持っていることが話だけでも伝わってきました。それをまとめるのは骨が折れる作業ではありました。

しかし、同時に聞き書きはとても楽しかったです。「聞き書き甲子園」という機会は、ユリさんという人間と、インタビューという単なる質問で接するだけではなく、対話をしていくことで、藤本ユリさんという「人格」に引き込まれていくうれしさを実感し、大変心を動かされました。日常で自然と口に入って来るもの、目にするものは、すべてたくさんの物語があり、大切に手を加えられているんだと、深く考えるようになりました。これまでの人生になかった、素晴らしい経験でした。

※ページの都合により、本文を抜粋し、掲載しています。

profile



藤本 ユリ

生年月日：大正15年1月3日

年齢：87歳

職業：拾い昆布漁業

略歴：毎年夏に知床半島の突端に近い浜、赤岩にある番屋に行き、一人で自給自足の生活で昆布を拾い続けている。知床の番屋暮らしに誇りを持っており、彼女の生き方は、地域の人たちにとっても生きる指針となっている。



岡山 山県備前市日生は、カキの産地として有名な漁師町です。日生漁協の組合長であった故・本田和士さんが、「聞き書き甲子園」の話し手である「海の名人」に選ばれたことをきっかけに、「聞き書き」の卒業生と日生とのつながりが生まれました。そして 30 年ほど前から同漁協の協力で、カキ養殖の体験授業を行ってきた日生中学校の藤田孝志先生とのご縁ができ、2013 年よりアマモ場の再生活動（※）と「聞き書き」の手法を取り入れた海洋学習がスタートしました。以下、藤田孝志先生に、この 4 年間の実践内容と成果を紹介いただきます。

1

日生中学校での実践

1 年目▶▶

体験活動と言語活動の融合 「聞き書き」学習の導入と発展

●——背景

「聞き書き」を導入することで、「アマモ場の再生活動」という体験活動に「言語（表現）活動」を融合させることができると考えた。すなわち、本校の「総合的な学習の時間」（以下、総合学習と略す）の課題であった「体験ありて学びなし」という作業的な体験学習に終始していた学習活動に、「聞き書き」という新たな実践的かつ探求的な学習を加えることで克服できると考えたのである。

●——集団での「聞き書き」への挑戦

日生中学校が初めて「聞き書き」を学習活動に取り入れた際に、最も苦慮したのが「集団」として行うことが可能かどうかであった。本来の「聞き書き」は個人が興味ある話者（話し手）を選択し、その話者のところに行き、話を聞く。しかも数度の訪問を

繰り返し、話者と心を通わせることで「対話」が成立する。しかし、日生中学校が行う「聞き書き」は、学校における学習（授業）として位置づけた「集団」としての「聞き書き」であり、回数も 1 回である。どこまで本来の「聞き書き」に近づいた取り組みとなるか不安も大きかったが、あえて「聞き書き」を学習方法（ツール）として活用することを第一として取り組むことにした。

実践内容

●——協力

初めての「聞き書き」ということから NPO 法人 共存の森ネットワークのスタッフおよび「聞き書き」の実践経験のある大学生に協力を依頼して実施。

※「アマモ場の再生活動」とは…

「アマモ」とはイネ科の海草で、日本の海岸沿いに昔から生息している植物。光合成により酸素を供給し、水質を浄化するとともに、魚類の産卵場所や生物のすみかとなり、海の生物多様性を保つ役割をしている。高度経済成長期の海洋汚染や護岸工事により生息域が減少。日生では国内で最も早く、1990 年代より、漁師によるアマモ場の再生活動（流れ藻を回収し、種を採取して増やす）が始まり、現在は市民も参加しての活動に発展している。

☑【ツールとしての「聞き書き」の特性】

「聞き書き」という学習方法は、単なるインタビューではない。「その人の仕事と半生から人生観や世界観」を学ぶという姿勢を重視し、事前学習から事後学習まで一貫して「言葉を大切にしたい表現活動」に徹する。何を質問するか、聞き取った内容をどのようにまとめていくか、これら一連の活動は、生徒に「主体的な学び」を体感させ、考えることや表現すること（伝えること）が自然に身につくプログラムである。

☑「総合的な学習の時間」の目標

地域（ふるさと）のすばらしさを体験的な学習や探求的な学習を展開することで学ぶとともに、その学びを通して主体的に学習活動に取り組み、課題を解決していく力を身に付けさせ、自らの生き方や地域の将来について創造的に考えることができる力を養う。

☑身に付けさせたい「生きる力」に必要な資質・能力・態度

① 学習方法・学習活動（表現力）

探求的な学習の仕方や追究のための学習活動に関するいろいろな方法を習得し、相手や目的に応じてわかりやすくまとめたり、表現したりすることができる。

② 生き方・あり方（思考力）

学習に興味・関心をもち、課題解決のために意欲的に考え、行動することができる。自らの将来を考え、夢や希望をもち、自己実現をはかる努力ができる。

③ 地域・社会との関わり（判断力）

他者や地域と積極的に関わりながら、地域についての学びを深め、地域の良さと課題を再認識し、地域や社会に何が貢献できるかを幅広く考えることができる。

●——話し手

「話し手」は地元、日生の海を知り尽くした「海の前輩」である日生町漁協に所属する漁師さん。「アマモ場の再生活動」という体験活動と「聞き書き」という言語活動の融合を通して地域（ふるさと）に関する学習を展開する目的があったからである。

●——当日の様子

最初に、NPO 法人 共存の森ネットワーク事務局長の吉野奈保子さんに「聞き書き」とは何か、どのような活動であるか、本日の活動の進行などについて説明していただいた。このことにより、生徒たちはもちろん、話者となっていた漁師のみなさんにも「聞き書き」を理解していただき、その後の活動がスムーズに展開していった。

その後、生徒たちは 5 班（1 班 10 人）に分かれ、5 人の漁師さんに自分たちが生まれる以前の日生の海、日生の漁業、アマモ場の再生への思いなどを自らの半生とともに語っていただいた。

初めての試みだったこともあり、学校での生活班をそのままに、2 クラス 5 班（5～6 人）を合体させて「聞き書きグループ」とした。各グループ 10～11 人の中で、司会者・質問者・記録者（メモ・ボイスレコーダー）に役割分担をして、事前に質問内容を考える等の打ち合わせをして臨んだ。

質問が伝わるか、対話が噛み合うか等々の心配を吹き飛ばすかのように、各グループでの会話は弾み、身振り手振りを交えて説明する漁師さんの姿が見られ、あちらこちらで笑い声が起るなど和やかに時

< 2013 年日生中学校第 2 学年 総合的な学習の時間 授業概要 >

第 2 学年総合学習 「聞き書き」学習

1 目 的

- (1)「地域を知ること」を目的として、日生漁業に従事されてきた方々から漁業や日生の海、日生の生活等々に関する話を聞き取る活動を通して日生について学ぶ。
- (2) アマモ場の再生事業が日生の漁業の活性化につながり将来の日生を築いていくこと、さらには地球環境の改善に寄与することを学ぶ。
- (3) 地域の方の指導を得ることにより、地域の方との交流の場とする。

2 参加者 合計 63 名 (生徒…58 名/教員…5 名)

3 期 日 平成 25 年 6 月 17 日 (月)

4 場 所 日生町漁業協同組合 2F

5 当日の予定 13:20 ~ 13:40 移動 (日生漁協)
13:50 ~ 14:30 講話 (NPO 法人共存の森ネットワークの吉野さんより指導)
14:40 ~ 15:40 聞き書き
15:40 ~ 15:50 まとめ
15:50 ~ 16:10 移動 (学校)

6 持ち物 (準備) ・筆記用具 (総合ファイル) ・ボイスレコーダー

7 その他 ・グループ構成および各グループの質問事項に関しては事前に準備しておく。
・日生漁業と事前に打ち合わせをしておく。
特に、インタビューを受けていただける方に関する事前資料など。

が過ぎていき、気がつけば予定時間をオーバーしていた。「まとめ」では満足そうに報告を聞く漁師さんの笑顔や他グループの報告を真剣に聞く生徒の様子に、「聞き書き」の可能性を確信することができた。全体指導の吉野さんや各グループをサポートした大学生の支援の力が大きい。

自らの体験を通して語られる言葉は、生徒たちの

心に日生の海を愛する漁師の生き様とともに、彼らが懐かしがり残念がる「海の変化」が強く印象づけられることとなり、あらためて「アマモ場の再生活動」の意義を学ぶことができた。

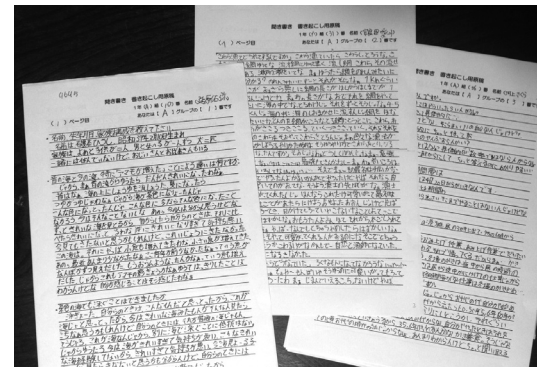
その後、「聞き取りデータ」(ボイスレコーダー・メモ)をまとめ、資料などで補足しながらレポート(パネル)に仕上げていく学習に取り組んだ。



2013 年 聞き書き授業の写真



ボイスレコーダーでインタビューをとっている様子



手書き書き起こし原稿の写真

●——アウトプット

夏季休業中、大学生と代表生徒との共同作業により「聞き書きデータ」はパネル原稿へとまとめることができ、最終的な校正を経て「聞き書き」パネルは完成した。(P56 を参照)

●——課題

当初は、各グループ内で担当を分けて、ボイスレコーダーのテープ起こしとメモをまとめる同時進行を試みたが、想像以上に「まとめる作業」に時間がかかり、計画を変更せざるを得なかった。各グループが 10 名以上であることから、まとめの役割分担によっては一部の生徒の負担が大きくなったり、生徒の能力(意欲や学力など)による進捗差があったり、時間的制約があったりしたことが要因である。これらが個人ではなく集団で「聞き書き」に取り組む場合の課題である。

●——成果

一方で、「聞き書き」学習の成果は多大であった。いくつか挙げておく。

① 地域学習・海洋学習としての効果

日生という地域(ふるさと)に漠然とした親和感はあるとしても親密な帰属意識は少なかった生徒にとって、漁師さんから直接に聞く話は日生が漁業によって支えられてきた歴史を実感することになるとともに、日生の海と漁業の現状と課題、その解決に向けた「アマモ場の再生活動」の意義は大きな衝撃であった。特に 30 数年間に渡って漁師さんが取り組んできた歩みは、実際に自分たちが体験した「流れ藻の



「地域の教育力を生かす視点が重要である。自然、産業、文化など、地域社会に存在する多様な学習資源を通じて子どもたちは豊かな学びを体験できるだろう。また、地域に根ざした総合学習への取り組みは、必然的に教育環境、生活環境としての地域をとらえ返す視点をもたらしだそう。さらに、総合学習による学習成果が、よりよい地域社会へと活用されるとき、子どもたちの社会参加の意欲が培われ学ぶ意味も納得・了解されよう」(猿田真「地域に根ざした総合学習の計画・展開」)

- (1) 地域の学習資源は、生徒に直接的な体験として豊かな学びをもたらす。地域の人からの学びはダイレクトに生徒に迫るものである。
- (2) 地域を学ぶことが社会性を身につけることに結びつく。地域の人と共に体験したり交流したりする機会をもつことは意義がある。
- (3) 総合学習で地域を取り入れることは、生徒が地域を理解するだけでなく、地域が学校に関心を持ち、生徒に目を向ける機会となる。

学校以外の機関や人との協力関係のもとで地域の「教育力」を積極的に生かし、総合学習において工夫のある活用を考えていくことが、生徒に「生きる力」を培う上で重要である。すなわち、地域の教育資源を学習に取り組むことは、生徒に「人との関わり」や「社会的視野の広がり」など、学びの場としての深まりをもたらす。たとえば、地域の人との交流は、生徒に直接的な体験として迫り、学校で学んだ知識等を生活の中で実感をもって理解する機会となる。また、地域の人から学習活動や成果の評価をもらうことで、生徒の学習活動への意欲となり、社会の一員としての自覚を促すことが期待できる。

回収活動」と直結し、生徒に日生が故郷であり、その故郷の海を守る活動であることを実感させた。

② 思考力・判断力・表現力としての効果

「対話」を成立させるためには、事前の質問を考えるだけでなく、当日の「聞き書き」においても相手の答えの中から質問を考え作り出していく必要がある。その前提は真剣に聞き、相手の話を理解することである。内容も言葉もわからないままでは「対話」はすぐに終わってしまうだけでなく、相手も話すことを止めてしまう。真剣なまなざしと真摯な問いかけを生み出そうとするならば、必然的に思考力は鍛えられ、よりよい質問を有効に問いかけるために判断力は研ぎ澄まされ、的確に相手に質問を伝えるために表現力は磨かれていく。そして、何よりも大学生の適切なアドバイスや補足質問は、生徒にとって最大の模範として効果的な学習となった。

「まとめ作業」においても大学生のサポートは、さまざまな学習効果を生み出した。

たとえば、感想文や作文などの学習経験しかない生徒や語彙の少ない生徒にとって、文章 構成・表現方法・文章推敲などは難しく、大学生からのアドバイスや共同作業そのものが学習となった。事実、文章を書くことが苦手な生徒や語彙力の乏しかった生徒が教科の授業や宿題、生活ノートの日常欄に書く文章が格段に向上し、さらには文章読解力も向上した。特に最近の生徒に見られる、自ら考えることを安易に放棄する傾向が減少し、学習意欲・学習態度が前向きになったことは、大学生の姿勢の反映と受けとめたい。

③ コミュニケーション能力としての効果

両親や親戚、教師以外の大人との交流が希薄な生徒にとって、近所のおじさんや時折見かける程度のおじさんであった漁師さんへの「聞き書き」が、はたしてできるだろうかという不安はあった。確かに最初は緊張感からインタビュー形式の応答であったが、漁師さんの語る半生や日生の海に対する思いなどを聞くうちに、生徒の中に新鮮な感動が生まれ始め、尊敬の気持ちが親近感に変わっていく様子がその表情から見受けられた。

普段あまり話さない生徒が身を乗り出して漁師さんの話を聞き、質問を返し、見事な対話のキャッチボールをしている。

「まとめ作業」においても、同級生や大学生と「対話」しながら共同作業を行っていく。互いに意見を言い合い、相手の考えを受け入れ合いながら、漁師さんから受け取った話をまとめていく。これは「集団」での聞き書きにおけるプラス面でもある。

…相手の話を聞くということは、ただ言葉を聞くだけでなく、相手の動き、目の光り、あるいは場が醸し出している雰囲気、におい、すべて聞いて相手のことを受け止めることで、それがコミュニケーションの原点なんです。…言葉だけでなくその時の場の雰囲気だとか、相手の表情だとか、それから相手の動作から、相手のすべてを理解していく。言葉は、わずかの部分でしかなかった。コミュニケーションっていうのは、五感全部でやっていたのです。…聞き書きというのは、相手の人生と自分の人生をぶつけ合うというコミュニケーションなのですね。

(澁澤寿一『叡智が失われる前に』)

④生きる力としての効果

「聞き書き」は話者の人生を聞き取ることである。本や雑誌、映画やTVから他者の人生を学ぶことはあるが、直接に目の前の方から、その人の生きてきた人生を学ぶ経験は少ないだろう。本や雑誌に載るほどの偉人でもなく、世に知られた業績があるわけでもないが、ひとつの職業に生きてきた人の人生は生徒にとって貴重な生きることの「道標」となる。

…たとえば、船大工は僕たちから見ればひとつの職業だけれども、彼と彼の家族から見れば「船大工という生き方」なんです。だから船をつくる作業工程を聞く中でその人の職業を知り、その人の「船大工という生き方」を浮かび上がらせていくというのが、実は「聞

き書き」の最大の仕事なのです。
(塩野米松『塩野米松流 聞き書き術』)

それまで祖父や父の仕事である漁師が好きでな

かった生徒が、「聞き書き」を終えてから高校を卒業したら漁師を継ぐと言い始めて母親を驚かせている。また、大学で環境問題を研究したいと進路を決めた生徒もいる。

2・3年目▶▶ 先輩から後輩へつなぐ「聞き書き」

●——学校内での位置づけの大切さ

翌2014年、総合学習の中核に海洋学習を位置づけ、その重要な柱として「聞き書き」を毎年1年生で取り組んでいくことに決めた。そして、昨年度の成果を生かしながら課題を解決する試みを加えて計画した。

そのひとつとして、話者に漁師さんではなく、「アマモ場の再生活動」を中心にさまざまな立場から海

の問題に関わっている外部関係者の方々を選出した。海に関して広い見識と多面的な視点をもたせようと考えたからである。また、事前に話者に関する情報を集め、それをもとに質問事項を考えさせるなど準備としての事前学習を前年以上に行った。

他に、グループ構成を生活班の合同グループではなく、先に代表生徒（リーダー格）を選び、各グループによる格差がないように成員を編成した。

2年目の実践

☑ 質問事項を考えるポイント

共通

- ・プロフィール（どこに住んでいるか、職業、仕事の内容など）
 - ・いつから「海」「アマモ」などに関わっているか。
 - ・どのような関わりをされているか。（どのような立場）
 - ・その関わりをされていて、楽しいこと・苦勞されることは何か。
- ※（最後に）自分たちへのメッセージ

個別

話者	内容（質問事項のポイント）
里海づくりNPOの代表	・アマモやアマモの再生活動などについて ・里海づくりとはどんなことか
全国の里海づくりに関する関係者	・研究所の仕事内容 ・世界の海洋や環境問題など
県水産課職員	・行政（役所：水産課）の仕事について ・日本や瀬戸内の海洋の現状について（海の汚れなど）
県の水産試験所職員	・研究の内容や目的について ・日本や瀬戸内の海洋の現状について
漁業の専務理事	・日生町漁協としての取り組んできた理由と経緯 ・アマモ場の再生による日生の海の変化
全国の里海づくりNPO代表	・現在の「日本の海」の状況と環境再生の必要性 ・全国でがんばっている人たちとの出会い

○グループ内での役割分担

司会（発表も担当）と質問者（3～4人）、メモ担当（3～5人）、レコーダー担当（1～2人）

○「聞き書き」→「メモ」から要点をまとめる→「発表」→後日、さらに整理

時 間	内 容
9:00～ 9:10	全体説明（教員）：授業の流れについて
9:10～10:10	講義Ⅰ（外部講師）：「アマモ」について
10:10～10:30	休憩（机の設置変更→グループに分かれる）
10:30～11:00	講義Ⅱ（外部講師）：「聞き書き」について （説明15分＋質問を考える15分） ※しっかりと「メモ」をとる。考える
11:00～11:10	休憩
11:10～12:00	各グループ（別紙）で、「話者」に質問をしながら聞く。 ※ワークシートに「聞き書き」内容をメモしていく。 （後で発表できるように整理しながら）
12:00～12:10	各グループで「発表」に向けてのまとめ
12:10～12:20	休憩
12:20～12:40	まとめ（外部講師） 各グループの発表（各3分程度）を受けて、「聞き書き」の ポイントと今後のまとめ方についてのアドバイス

●——アウトプット

2年目は、開始時期が遅かったため、メモによる「まとめ作業」のみ行った。

①「Q&A方式」によるまとめ

各自が「聞き書き」の際に取った記録用紙（メモ）を、Q（質問）とA（応答）にまとめ、データとする。

②各自がまとめたデータを、各グループ内で整合・整理しながら、「関係する項目」別に選別し、さらに集約して5項目にまとめる。

③各グループ別に、まとめたデータにインターネットや本などから補足資料を追加したり、図表を作成したり、写真を選んだりしながら、パネルを作成する。（パネルの形式やレイアウトは昨年度のものを参考にする）

●——成果

3年目の実施に向けて、総合学習の見直しを行い、「聞き書き」学習と「アマモ場の再生活動」を導入した総合学習の全体構想図と年間指導計画、海洋学習全体構想図を作成した。

3年目の実践

開始時期が遅かった前年の失敗を教訓に、年度当初より外部関係機関と当該学年（1年生）との調整を図り、実施時期を7月中旬（期末考査後）と決め、その後の活動計画を定めた。

前年度までの「まとめデータ」を生かすために、話者を一昨年度の方から3名、昨年度の方から3名選り、先輩の「聞き書き」をさらに深めること（先輩から後輩に引き継ぐ）をテーマに行った。

●——活動紹介のプレゼン

… 新入生に本校の海洋学習を伝える

- アマモとは何か（説明）
- アマモと漁業の関係（役割）
- アマモ場の変化（減少と再生）
- アマモと牡蠣の関係（相補性）
- アマモ場の再生活動Ⅰ
- アマモ場の再生活動Ⅱ

2年生の生徒（6グループ）が大学生のサポートを受けながら、自分たちが1年間学習し、活動してきた「アマモ場の再生活動」について、新1年生に紹介するプレゼンを作成した。上図のように6つのテーマごとに分かれ、活動の内容、意義や目的に関してまとめ、代表生徒が説明を行った。（この「プレゼン」が、『人と海に学ぶ海洋学習－日生中学校のアマモ場再生の取り組み－』という冊子に結実していくことになった）

1年生にとっては教員から説明を受けるよりも、上級生が実際に体験した内容を、その先輩が写っている写真や動画を見ながら聞くことで海への新鮮な興味と関心を引き出すことになった。2年生にとっては自分たちの活動を後輩に引き継いでもらいたい思いが、その語り口に表れて力のこもった説明となり、逆に自分たちも後輩に負けずに取り組もうという自覚が芽生えることになった。

●——「聞き書き」の要点と質問事項の提示

… 先輩から後輩に引き継ぐ

「プレゼン」作成と並行して、各グループの別メンバーが、先輩や自分たちが行った「聞き書き」（パネルやまとめたメモなど）から、話者に「聞き書き」を行うための要点（前回に聞いた内容の要旨）と参考となる質問事項（質問の柱・参考質問）をまとめ、1年生に引き継ぐため（今までの内容をさらに深めるため）の「資料」を作成した。

2年生が1年生に提示した「資料」の抜粋

【要点】

今の海は、昔と比べてきれい（透明）になっているが、きれいになりすぎていて栄養がないのではと心配する部分がある。汚染の一番の問題は、家庭排水。それはいま、寒河の施設が処理しているが、その処理のための塩素（川の水を消毒するもの）が山からくる栄養素までも少なくしてしまっていて、カキなどが育たない。だから、家庭排水を減らして塩素を減らせば、自然からの栄養分が海に届いて、カキや魚などが育つ。海を育てるんだったら山を育てるっていう言葉があるように、やっぱり山からの自然の栄養分が流れてこなかったら、海のためにもよくない。

【関連質問】

- ・ 山、海を育てるとは具体的には？
- ・ そのためにどんな活動がありますか？
- ・ 海に栄養を戻す具体的な方法は？
- ・ 家庭排水ってどうしたら減るのですか？
- ・ 海はきれいなのに栄養が少ないのですか？
- ・ 山からの栄養分って具体的に何ですか？

次に、この「資料」をもとに、NPO法人共存の森ネットワークの「聞き書き」の実践経験をもつ大学生6人と1年生の各グループが、どの内容につい

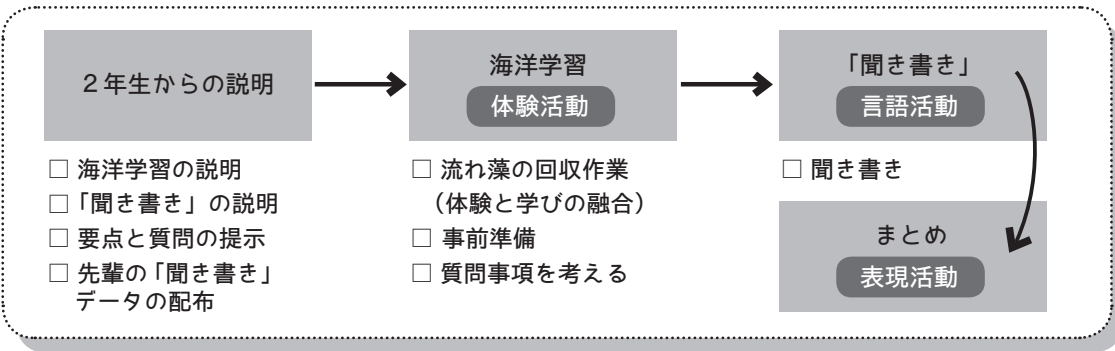
て詳しく質問するか、何をテーマに聞くか、まとめ方、今回の「聞き書き」の要点と方法などの打ち合わせを行った。

十分に事前学習を踏まえての「聞き書き」であったこともあり、漁師さんからは「質問内容が以前より深いことを聞いてくる」「事前に質問を教えてもらってないと答えられんぞ」など驚きとともに嬉しそうな声があがっていた。中には、外に飛び出して漁網や道具を取りに行き、その使い方などを説明する漁師さんの姿もあった。子どもや孫のような生徒

たちが目を輝かせながら漁師さんや専門家の方々の仕事について質問し、メモを取りながら聞き入る。説明に熱が入るのも当然で、休憩も取らず、予定時間を遥かにオーバーした。終わった後、話者の方々は満足そうな笑顔であった。

●——アウトプット

生徒たちは各グループごとに担当大学生のサポートを受けながら、ボイスレコーダーに録音したテープを文字に起こし、要点をまとめ、イラストを描き、写真を選びながらパネルの原版を作り上げていった。



4年目▶▶ パネルから新聞へ

新しい方々を話者に選定したことから、それぞれの話者の「特徴」を生かした「テーマ」を設定し、そのテーマに基づいた「聞き書き」を行うことにした。

そのため、事前学習では、話者に関する情報をできるだけ収集して生徒に「資料」として提示し、それをもとに質問事項を考えさせた。その際、歴代の先輩が作成した「聞き書き」パネルや資料なども参考資料として提示し、質問事項や何を聞き取っていくかなど「聞き書き」の方法などを理解させた。

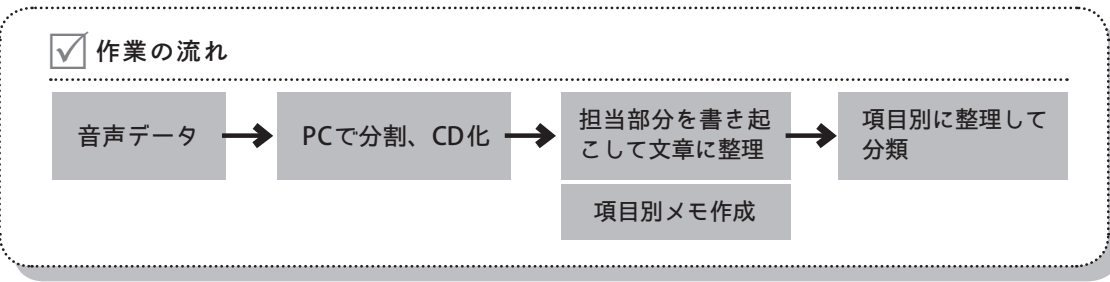
今回の「聞き書き」活動では、話者を4つのテーマに基づいて選定した。

- ① 漁師さんを支え、自らもアマモ場再生活動に従事された漁師の奥さま
- ② 日生諸島に居住されている漁師さん
- ③ アマモ場再生活動に初期から従事されてき

たリーダー格の漁師さん
④ 日生外に居住しながら日生の海及びアマモ場再生活動に関わってこられた専門家

今年度は「パネル」形式ではなく「新聞」形式でまとめることにした。その際、タブレットに導入されている「新聞作成ソフト」を活用した。（本校はICTを活用した授業や学習を推進していることもあり、生徒1人に1台のタブレットが用意されている）また、例年苦労していたボイスレコーダーのテープ起こしに関して、今年度は「音声データ」をPCで編集し、それぞれの生徒が担当する部分（約10分程度）ごとに分割し、その生徒の担当分のCDを作成した。これにより、各グループごとに全員がそれぞれの担当分の「音声データ」を文章に起こすだけで済むことになり、時間と負担の軽減を図ること

ができた。（夏季休業中の宿題とした）文章化した「データ」を、事前にグループ内で話し合っ考えた「新聞」の大見出し・小見出しとなる項目別に仕分けたメモと整合させながら、補足や追記、文章の校正作業（重複内容や重要でない話題の削除、文言の統一など）を行った。その後に、記事の配置やレイアウトなどを考え、各グループごとに独自の構成を「新聞ソフト」を活用しながら整えていった。



基礎から応用へ

初年度（2013年度）は「聞き書き」を2年生で行ったが、その後は毎年1年生で行っている。「聞き書き」の基礎的な学習方法を学んだ生徒は、2年生・3年生においても学校行事だけでなく教科学習にもその方法や技法を応用・活用して、理解力や表現力

を向上させている。特に、文章を書くことやレポートなどにまとめることを苦手とする生徒が減少している。話を聞く態度が格段によくなり、集中力の向上も見受けられるようになった。

2年生	広島研修旅行（広島原爆養護ホーム：倉掛のぞみ園・神田山やすらぎ園など）
広島には高齢となられた被爆者の方が入園されている広島原爆養護ホームが4園あり、本校では7年前より慰問に訪れている。小グループに分かれて入園者の方から被爆体験を聞かせてもらっているが、2015年度より「聞き書き」の学習方法を応用した被爆者への「聞き書き」を行っている。従前では漠然と被爆体験を聞くだけだったが、「聞き書き」学習を体験した生徒たちは事前にグループ内で役割分担を決め、メモに要点を書きながら被爆者の体験談を聞き、要所では的確な質問を行うなど「対話」を成立させていた。また、帰校後のまとめ作業においても一人ひとりが独創的な『広島平和新聞』を完成させた。	
3年生	沖縄修学旅行（国立ハンセン病療養所：沖縄愛楽園）
2013年度に初めて「聞き書き」学習を体験した生徒たちは、修学旅行で訪問した国立ハンセン病療養所沖縄愛楽園において小グループに分かれて入所者から体験談の「聞き書き」を行った。ハンセン病問題に関して事前学習を十分に行って臨んだ生徒たちではあったが、一人ひとりの過酷な運命、理不尽な周囲からの迫害、国家権力による強制隔離と家族との辛酸な離別、沖縄戦による悲惨な犠牲など、実際に語られる言葉でしか伝わらないことを実感した。この「聞き書き」を通して「記録」に残すことの意味を理解した生徒たちは、入所者の方々が生き抜いた証を『沖縄平和新聞』にまとめ上げた。	

探求学習と習得学習…「聞き書き」学習の成果と課題

① 感性… 心に響く

2016年5月、全国アマモサミットが日生で開催され、本校3年生が日生の漁師さんが取り組んできた「アマモ場の再生活動」30年間の軌跡を創作劇にして披露した。

当日は、生徒一人ひとりが、「カキの養殖体験」や「アマモ場の再生活動」を指導してくれた漁師さんや「聞き書き」活動で直接に思いを聞いた方々を思い浮かべながら演じ、感動的な劇となった。日生町漁協の漁師さんや関係者、全国各地から来場された方々から「感動した」「よかった」「昔を思い出し

て涙がこぼれた」等々の声が聞こえ、生徒たちも演じ切った達成感に満足していた。

「カキの養殖体験」や「アマモ場の再生活動」など体験活動だけであつたらば、きっと彼らはこまかで感情を移入させた感動的な劇を創り上げることはできなかったであろう。

漁師さんへの「聞き書き」から生徒たちが感じとつたのは、今まで気づくことさえなかった日生の漁師さんたちの海への熱き思いであり、海の守り人としての強烈な自負心であつた。日生の海を再生させようと動き始めて30年間、いったい何があつたのか、どんな試練と苦悩が待っていたのか、アマモ場の再

…木を伐る時、なるべく虫が入らない時期に木を伐った。夏に伐る木なんて、誰も買いに来なかった。消費者もそれを知っていた。ジャブジャブ水を吸い上げている時の杉で家を建てたら、すぐに腐っちゃうし、シロアリが来る。

…今、どこも森林組合も夏でも伐っている。それは乾燥機に入れて乾燥させればいいのだと思っているからで、乾燥機がなかったら、乾燥させる術をもう彼らは持っていないし、トラックがなかったら山から木を出す術も持っていない。

…今は農薬だとか化学肥料があるからそれをまけばいいのだけど、昔は農薬も化学肥料もなかったから、基本的に水の調整で稲作をやっていたのですね。

それで、その日の一番最初に射す朝日の光が、自分の田んぼにあたつた時の稲の色を見て、今日はこの農作業をやろうと決めているのだと。

…昨日と今日との色の違いがわからないと農業はできなかった。

…「木を植えれば100年後の森が見えるからね」って言ったの。じいちゃんには見えるの

です。森は1年間にこれだけ光を受けてこれだけ成長する、あるいは枝の張り方、葉っぱのちょっとした開き方の違いによって、この木だったら1年間でこれだけ成長して50年たったらこういう木になるんだなって、たぶん完璧に見える。

そういうことができないと、林業ができなかったし、農業もできなかった。漁師さんたちの話も山のようにある。海の中にどれぐらいの藻場が茂っているか、海の上からわからないと魚は獲れなかった。

…自然を読む感性の部分にくみ取れるのは、実は聞き書きなのです。民俗調査では、その部分がスコーンッと抜けて事実だけが出てくる。何月に山に入りました。木をこうして伐りました、という事実。どうやって木を見てきたかだとか、森の中でどうやって感じてきたかという部分は抜けてくるのです。民俗調査も重要だけど、その中に聞き書きがないと、自然の中で生きてきたということの立体的な像が出てこない。（澁澤寿一『叡智が失われる前に』）

生に賭けた漁師の生きざまを「聞き書き」を通して共感できたからこそ、先駆者たちの実像を演じることに誇りを感じ、長いセリフやナレーションを覚え、演技を身につけて劇を成功させることができたのだと実感する。

相田みつをの言葉に「感動とは、感じて動くこと」がある。生徒たちは、まさしく「聞き書き」によって感じ、動いたのだ。

いくら感動的な実話であっても読み物資料よりは、実際に目の前で本人が語る人生の方が重い。澁澤寿一氏が語るように（前頁コラム参照）ひとつの職業を続けて生きてきた中に、先人から代々受け継いできた技も知恵も込められている。話者の人生がその職業を通じて浮かび上がり、それが生徒の心に響くのである。

② コミュニケーション… 心をつなぐ

若者のコミュニケーション能力の低下が問題視されて久しい。学校現場においても常に課題に上がっている。その要因としてさまざまなことが考えられる。メールやSNSなど顔を見ないコミュニケーションツールが一般化し、極端に短い言葉や語彙よりも記号などを駆使した感情表現によって会話が成立している。地域コミュニティの崩壊に伴い、若者が多様な大人と接する機会が減っている。ゲーム、ネットなどバーチャルな世界を一人で楽しむか、あるいはバーチャルな世界を介して他者と交流するか、リアル（現実）とバーチャル（仮想）の垣根が曖昧になっている。

人間関係の稀薄さが加速化する中でコミュニケーション能力が低下しているのか、コミュニケーション能力が低下している中で人間関係が希薄化している要因のひとつは、言葉を使って互いに深く話し合い、聞き合っていないからだろう。言葉はもちろんのこと、五感によって互いをわかり合うためのツールがコミュニケーション能力である。それゆえ、このことを実体験を通して自覚させ、高める

有効な学習の一つが「聞き書き」である。

…聞き書きは、その人が生きたという行為や思いを抜き出してくるものなのです。

民俗調査が、こういうものがあつたという現実を積み重ねて記録を残していくものだとすると、聞き書きは、その人がどういう人生観なのか、どういう愛情、思いを注いできたかということを引き継いでいくものなのです。

…人生を聞くということは、相手の人生をそのまま受け入れるということです。

（澁澤寿一『叡智が失われる前に』）

最初は生徒たちは10分も持たないだろうと思っていた。自分とは関わりのない話、興味も関心もない話など飽きてしまうだろうと。しかし、生徒たちは漁師さんや初めて会った見も知らぬ方たちが話す海のこと、仕事のこと、日生のこと、自分の半生、楽しかったこと、嬉しかったこと、家族や趣味のこと……。その語りに引き込まれてしまい、時間も忘れ、休憩も取らず、いつしか一方的な話ではなく対話・会話になり、笑い声さえ生まれていった。「聞き書き」を通して心が交流しているのである。生徒たちにとって大人との真剣な会話はほとんど経験したことのない新鮮な感動であつただろう。

しばらくして感じたのは、生徒の授業を聞く態度が格段に向上してきたことである。説明を聞く視線がちがうのである。こちらを見て、目を見て話を聞こうとしている。教師に対してだけでなく生徒同士の関係もまた変化していった。「聞くこと」「伝えようとする」ということが人間関係を円滑にしている証左である。

③ 思考・表現… 心を伝える

「聞き書き」の事前・事後学習を通して、生徒の意識だけでなく学力、特に思考力や表現力は大きく向上した。

通常の授業に見られる「受け身型の学習」や「正

答を選択する学習」ではなく、「聞き書き」は「自ら考える学習」であり、「正答のない学習」である。資料などから話者への的確な質問を多様な応答にも対処できるように考えなければならない。対話がスムーズに成立するために質問の機会や全体の流れを適切に判断しなければならない。話者の語った言葉や内容を要点をとらえてまとめ、読者に伝わるように表現しなければならない。

「聞き書き」をパネルや新聞にまとめるだけではなく、1年生へのプレゼン（パワーポイントを活用

して）や冊子（『人と海に学ぶ海洋学習－日生中学校のアマモ場再生の取り組み－』）の作成を通して、人に伝えるための表現力を身に付けることができていった。

自分の考えや気持ちをうまく伝えることが苦手な生徒や文章を書くことが苦手な生徒、自ら考えるよりも先に正答を見よう聞こうとする生徒が多かった本校の課題が着実に克服できている。このことは、2016年度の『全国学力・学習状況調査』の結果にも表れている。

「総合的な学習の時間」で実施している学習活動は「アマモ場の再生活動」や「聞き書き」だけではないが、自分にとって有意義な学習であると実感していることが調査結果に端的に表れている。言語

活動は、体験活動を確認な学びに高めるだけではなく、言語活動によって、思考力・判断力・表現力等のより高次な能力の育成が期待できること確信している。

3

最後に…深まりと広がり

「聞き書き」の応用としては、自ら学び自ら考える力を育む探究的な学習と教科学習を中心とした習得型の学習をつなぐツールとして、さらには教科・領域を横断的に結ぶツールとして位置づけることができるだろう。各教科の中に「聞き書き」の要素を取り入れることも、あるいは各教科の学習によって身に付けた知識や方法（技法）を「聞き書き」に活用することも可能である。

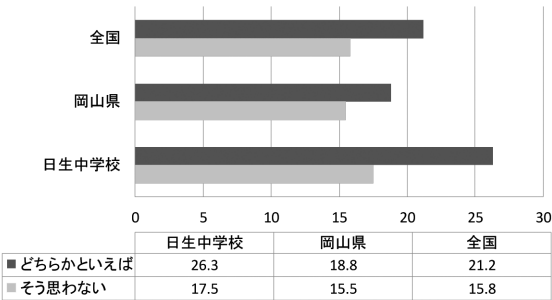
また、「聞き書き」は地域の教育資源や外部関係機関との有機的な連携を深めていくツールでもあ

る。海の近くであれば漁師さんなど漁業関係者に、山の近くであれば林業従事者に、工場や商店街の近くであれば工場労働者や経営者、さまざまな商店の店長や店員に「聞き書き」をお願いすることは可能であろう。「聞き書き」を通して生まれ育った地域をより深く知ること、そして地域を大切に守っている人々の思いを知ることができる。

「聞き書き」には学習ツールとして無限の可能性があることを確信している。

400字詰め原稿用紙2～3枚の感想文や説明文を書くことは難しいと思いますか

「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」とともに全国平均を超えている。両方の合計では、全国に比べて7ポイント以上も高い。約半数の生徒が書くことをそれほど「難しい」と思っていないのである。事実、講演や講話を聞いた後の感想文では、ほとんどの生徒が自分の思いや意見をA4用紙いっぱい書いている。中には裏面までも使って書き込む生徒もいる。



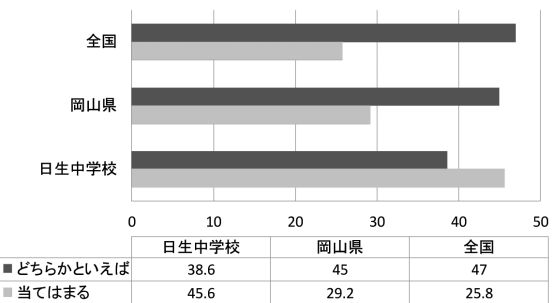
「学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文に書いたりすることは難しいと思いますか」という質問に、「そう思わない」

が全国では13%に対して、本校では23%と10ポイントも高い。関連する質問事項でも同様の結果が出ている。

「総合的な学習の時間」の授業で学習したことは、普段の生活や社会に出たときに役に立つと思いますか

「当てはまる」と断言できる生徒は、全国平均と比べて約20ポイントも高い。「どちらかといえば当てはまる」との合計では、全国が約73%に対して本校は84%を超えている。

「総合的な学習の時間の勉強が好きですか」という質問においても、全国が26%に対して、本校は37%の生徒が「当てはまる」と答えている。「どちらかといえば、当てはまる」との合計では、全国が68%に対して、本校は83%である。





授業事例：日生中学生の聞き書き授業計画

●日生中学校1年生：「海の先輩に聞く」授業の計画例

段 階	目安時間	内 容	備 考
事前準備	2 時間	・「聞き書き」とは何かを知る ・取材対象について調べる ・質問を考える ・取材時の役割分担を決める	※取材対象については、他の授業の中で詳しくそのテーマを扱うことも可。 例) 社会：地場産業について 理科：里海について 等
取材	2 時間	・話を聞く（インタビューを行うのは1～1.5 時間ほど） ・話を聞きながらメモを取る	
まとめ作業	4 時間	・書き起こし ・「聞き書き」へまとめる（話のテーマごとに整理、文章を整える） ・題名、小見出しづけ ・話し手に確認	
発表	1 時間	・まとめた「聞き書き」の発表	※文化祭や冊子での発表でも可 ※話し手を招いた発表会ができるとうい

●「聞き書き」の授業構成

時 間	生徒の活動	指導上の留意点
10 分	準備（机の設置→グループに分かれる→録音機・メモの用意を調える）	
5 分	教員からの全体説明：授業の流れについて	
80 分 （開始40分後に休憩10分）	事前に決めていたグループごとに「聞き書き」を行う。 ① 漁師さんを支え、自らもアマモ場再生活動に従事された漁師の奥さま ② 日生諸島に居住されている漁師さん ③ アマモ場再生活動に初期から従事されてきたリーダー格の漁師さん（2 名） ④ 日生外に居住しながら日生の海及びアマモ場再生活動に関わってこられた専門家（2 名） ●進行に関する留意事項 ○グループ内の役割分担に従い進行していく。 （代表生徒が司会） ○各グループはそれぞれ、話者が、なぜ（どうして）、いつから、どのように、「アマモ場の再生活動」に関わっているかを聞いていく。 ●アマモ場の再生活動に関して ○今、具体的にどのようなこと（活動・生活）をしていて、将来の日生の海についてどのように考えているか（意見や活動に関する考え）などを確認していく。 ●各話者のテーマに関して ○グループごとに、事前に準備しておいた質問事項をもとに質問をしながら話を聞く。 ・応答の中で気になったことやわからない言葉（専門用語）などがあれば質問をする。 ・ワークシート（記録用紙）に「聞き書き」内容をメモしていく。メモは要点を押さえ、テープ起こしの原稿と照合できるように工夫する。（時間、質問項目、ポイントなど）	・休憩時間に、サポート役の教員で進捗状況の確認と後半の進行に関して打ち合わせを行う。 ↓ ・進行などを代表生徒に指示する。 ※話者との「対話」が途切れた場合、サポート役の教員が適切な質問や会話でつなげていくように配慮する。
5 分	話し手へのお礼 → 片付け	



「聞き書き」手法のまとめ

準備する

聞く
(取材)

書き起こす
整理する

仕上げる
確認する

基本の「キ」

①話し手を探す

「聞き書き」のテーマを考えて、その目的に合う地域や職種などから話を聞かせてもらう人を探す。家族や知人などに紹介してもらうのもよい方法です。

②話し手をお願いする

電話や手紙で取材を申し込みます。「聞き書き」の目的を説明し、承諾を得られたら、訪問する日時や場所を相談します。

取材の場所は、可能な限り、話し手のご自宅や職場などに設定し、インタビューとあわせて、現場の見学ができるとういでしょう。

③下調べ・質問表づくり

「話し手」の職業や住んでいる地域について、本やインターネットで調べ、それをもとに質問を考えて箇条書きのメモをつくります。この作業で、話の流れや聞くべきことを事前に整理しておきます。

④持ち物を確認する

録音の失敗は致命的です。そのため、録音機の使い方は事前に確認し、操作に慣れておくとういでしょう。また、録音機のバッテリーのチェックも事前に行い、予備の電池も持っていきましょう。

グループ (学校)で 行うコツ

①「話し手」を探す

- ・授業の目的に沿ってテーマを設定します。
- ・これまで行ってきた総合的な学習(あるいは体験活動)をより深めるために、生徒とも話し合ってテーマを決めるとよいでしょう。

②「話し手」をお願いする

- ・「話し手」は、「現場」をよく知っている人(そこで働いている人など)を選びます。「話し手」の経験や実感に即して話を聞くことが大切です。本に書いてあるような一般的な知識は、調べればわかることです。

③下調べ・質問票づくり

- ・「話し手」のプロフィールをあらかじめ用意し、質問を考えましよう。 **POINT ①**
- ・取材のときの役割分担も相談ましよう。 **POINT ②**

POINT ① グループで質問を考える

- ①プロフィールを読み込む
- ②各自で質問を考える
 - ・生い立ち/仕事の内容/自然環境との関わり/これからの展望などというように大きくテーマを分けて、質問を考えさせます。
- ③質問を見比べて分類する
 - ・ポストイットやメモ用紙に質問を書き(1枚につきひとつの質問)、それを並べて分類まします。
 - ・類似する質問はひとつにまとめます。
- ④質問事項を順番に並べて、質問表をつくる
 - ・時系列に並べて質問すると、「話し手」も答えやすいでしょう。
- ⑤質問表を見返して、もっと聞きたい、という質問を加える。
 - ※教師がグループを回り、適宜アドバイスまします。
 - あらかじめ、各グループにアドバイザー役の大学生や上級生を置くのも、ひとつの方法です。

POINT ② 取材のときの役割分担を決めておく

- (8人で行う場合)
- 司会・録音 (1人)**
 - 全体の進行役を担う。話し手のインタビュー内容を録音まします。
 - 質問者 (3人)**
 - 質問表を分けて、順に聞いていきます。
 - メモ (3人)**
 - 話をメモまします。あるいは、話を聞きながら疑問点をメモする担当を決めて、最後に質問してもいいでしょう。
 - 写真撮影 (1人)**
 - 取材の様子や話し手の仕事場所や道具、作業風景などを撮影まします。

準備する

聞く
(取材)

書き起こす
整理する

仕上げる
確認する

基本の「キ」

グループ
(学校)で
行うコツ

①取材のはじめに話すこと

・自己紹介

話し手も、誰がなぜ話を聞きにきたか不安に感じています。自分のことからまず話すことで、話し手も心を開いてくれるはず。自己紹介は心の交流の大事な一歩です。

・「聞き書き」の趣旨説明

「聞き書き」とは何か。また、どのような目的で話を聞きに来たのか説明しましょう。

・録音と撮影の許可

「聞き書き」には録音が必須であることを伝え、インタビュー内容を録音することを許可してもらいましょう。また、写真を撮影してもよいか、確認しましょう。

②取材をする場所と時間の設定

・静かなところで聞く

よりクリアに録音するために、雑音が入らない場所で取材をしましょう。

・取材時間は1～2時間程度。

・仕事場や作業の現場も見せてもらい、実物を見ながら話を聞けるとさらに良いでしょう。

③質問する

・質問は具体的にしましょう。5W1Hを押さえることが基本です。

①取材のはじめに話すこと

- ・司会役のリーダーが、「聞き書き」の趣旨を「話し手」に伝え、録音や撮影の許可も得ましょう。
- ・自己紹介はグループ全員(各自)、行いましょう。

②取材場所と時間の設定

- ・できるだけ、「話し手」のご自宅や仕事場で話を聞きましょう。
- ・複数の「話し手」を学校にお招きし、一斉に「聞き書き」を行う場合は、録音環境に注意しましょう(複数の教室に分かれる、グループごとの机を離すなど)。

POINT 1

- ・十分な取材ができるように、少なくとも40分程度のインタビュー時間をとります。

POINT 2

③質問する

- ・質問は担当の生徒を中心に行います。
- ・最後に、担当以外の生徒も質問ができるように、司会役は進行を工夫しましょう。

POINT 3

POINT 1 話し手が座る場所と録音の仕方

- ・話し手の声がグループ全体に届きやすいように、話し手の座る位置を工夫する
- ・話し手の声がクリアに録音できるように工夫する
※録音機はできるだけ「話し手」のそばに置きましょう。
※録音機の下にタオルを置くと、メモをとる音などの雑音を減らすことができます。

POINT 2 取材時間を決める

▶確保できる授業時間に応じて検討する

インタビューを行う前に、グループで質問を考え、相談する時間を設ける必要があります。ある程度、まとまった授業時間を確保し、質問を考えるところから、実際のインタビューまでを一連の授業(活動)として行うことができるように工夫しましょう。

▶書き起こしの時間を考える

録音したデータを書き起こしするのは、大変時間がかかります。書き起こしの作業を行うことを前提とする場合は、生徒の負担を考慮し、グループの人数を調整しましょう。

▶取材の回数

できれば、1回、インタビューした後に、取材内容の確認を含めたインタビューの機会を再度、設定することが理想です。
2回のインタビューが可能な場合は、最初のインタビューを書き起こし、グループで取材内容を振り返り、不足している事柄や不明点、さらに深く聞きたいことをリストアップして、2回目のインタビューに臨むといいでしょう。

POINT 3 聞くときのコツ

- ◎まず、話し手のお名前、年齢、生年月日、家族構成、職業など、基本的なことを確認します。
- ◎「いつ」「どこで」「誰が」「何を」「どのように」「なぜ」という5W1Hを押さえて質問しましょう。
- ◎形容詞は具体的に聞きます。(例:きれいな色→青みがかった紫色、長いはしごを使って→5mのはしごを使って など)
- ◎専門用語、固有名詞は漢字の書き方なども確認します。
- ◎一日の作業や一年の仕事、暮らしの様子を丁寧に聞いていくのも、ひとつの方法です。
- ◎知らないのは当たり前。恥ずかしがらずに、勇気をもって質問しましょう。

準備する

聞く
(取材)

書き起こす
整理する

仕上げる
確認する

基本の「キ」

グループ
(学校)で
行うコツ

①書き起こす

録音したお話を、その人の話し口調のまま、一字一句書き起こします。時間と手間のかかる作業ですが、「話し手」に対して理解を深め、どのような作品にするのかを考える大切な時間です。※聞き取れなかった部分は次回の取材で聞いてみましょう。

②文章を整理する

「聞き手」の質問を消して、「話し手」の言葉だけで文章をまとめていきます。質問を消しただけでは意味のわからない文章になる場合がありますので、主語などを補いながら作業します。人の話はあちこちに飛んだり、同じ話を何度もくり返したりします。同じ話はひとつにまとめましょう。また、「あのう」「えーと」など、話し言葉独特の言い回しは、読みやすくなるように削除し、整理しましょう。

③文章を削る

「話し手」の人柄や職業をより鮮明に浮かび上がらせるために、不要と思われる内容は思い切って削除しましょう。※愚痴や口癖、だれもが語る抽象的な人生論などは削除しましょう。その人の人生や生き方にとって大切なものが何か、伝えたいものが何かを見極めましょう。

①書き起こす

- ・録音したデータは先生が預かり、生徒が書き起こしをしやすいように、データを分割して生徒に渡します。
- ・書き起こしたデータはパソコンに入力しましょう。
- ・書き起こしが終わったら、データをプリントアウトし、話のまとまりごとに「小見出し」をつけます。(たとえば、「家族のこと」「子供の頃の遊び」など)
- ・テーマと明らかに関係がない話(雑談など)は削除しましょう。

POINT 1

②文章を整理する。

- ・「聞き手」の質問の部分は消して、「話し手」のみが語る文章に整理します。
- ・話のまとまりごとに分担を決めて作業を進めましょう。
- ・文章の整理はパソコンを使うと効率的です。
- ・書き起こした元のデータは、確認用に必要です。整理した文章は上書きせずに、別ファイルで保存しましょう。

POINT 2

POINT 1 書き起こし文章の分類の仕方

- ・書き起こした文章は、話のまとまりごとに小見出しをつけます。
- ・小見出しタイトルごとに、プリントを切り分けて、並べ替えてみるのもひとつの方法です。
- ・小見出しをポストイットに書いて、模造紙に貼り、グループ全員で共有できるようにして、作品全体の構成を考えましょう。

POINT 2 文章の整理の仕方

- ・聞き手の質問は削除し、話し手の言葉だけで文章をまとめます。必要に応じて主語などを補いましょう。繰り返しや言いよどみは削除し、読みやすい文章にしていきます。
- ・話し手が伝えたいと思っている内容を吟味して、不要な部分は削除しましょう。
- ・整理の仕方は各自の工夫次第ですが、「話の趣旨を曲げない」「話し手の人格を崩さない」ように注意しましょう。また、「話し手」のことを一切知らない「第三者」(読み手)が、この作品(聞き書き)を読んでも、内容がわかるように整理することを心がけましょう。

【書き起こした文章】

Q：森林組合で働き始めたのは、何歳のときですか。
A：えーと、22歳のときです。母はとても喜んでくれました。
Q：それは、よかったですね。
A：ええ、母はきっと……父も林業に従事していたので、その姿に僕を重ね合わせたのかもしれない。

【整理した文章】

私は22歳のときに、森林組合で働き始めました。そのことを母はとても喜んでくれました。林業に従事していた父の姿に、僕を重ね合わせたのかもしれない。

準備する

聞く
(取材)

書き起こす
整理する

仕上げる
確認する

基本の「キ」

グループ
(学校)で
行うコツ

①全体の構成を考える

作品全体の構成を考えましょう。たとえば、子どもの頃の話から時系列で文章をまとめていった方がよいか。あるいは、最近の出来事で、印象的な話から切り出した方がよいか。作品の構成は、作り手次第です。わかりやすく、面白く、読者が興味をもって読むことができるように工夫しましょう。

②作品タイトルと見出しを決める

作品の流れが決まったら、内容のまとまりごとに「小見出し」をつけ、作品の題名(タイトル)を考えましょう。また、「話し手」と「聞き手」の名前、取材した年月日も作品に添えましょう。

③話し手の確認をとる

作品がまとまったら、必ず「話し手」に読んでもらい、内容を確認してもらいましょう。間違いや補足する点、削除すべき内容がないかどうかを相談し、必要な修正を加えて作品を完成させます。
完成した作品は冊子などにまとめて「話し手」に届け、感謝の気持ちを伝えましょう。

！「話し手」と「聞き手」の信頼関係を大切にしながら作品を完成させましょう。

①全体の構成を考える

- ・文章のまとまりごとに、どのような順序で、作品をまとめれば良いか、検討しましょう。
- ・新聞形式でまとめる場合には、どの話を中心にするか。いくつの記事で構成するかを、レイアウトとあわせて検討します。

②作品のタイトルと見出しを決める

- ・作品全体(あるいは新聞)のタイトルを決めましょう。
- ・話のまとまり(あるいは記事)ごとに、「読んでみたい」と思わせる魅力的な小見出し(題名)を考えます。

③話し手の確認をとる

- ・作品の内容をチェックします。
- ・「話し手」に確認する作業は、教員が行っても良いでしょう。
- ・完成した作品とあわせて、生徒の感想文やお礼状も届けましょう。

POINT 1

POINT 1 話し手に確認する前に以下の点を確認する

- ☐ 作品の冒頭で「話し手」の名前や性別、年齢、職業、住んでいる場所、家族構成など、基本的な情報がわかる文章になっているか。
- ☐ 作品のテーマには一貫性が保たれているか。「話し手」の人生や人柄が、その職業などを通じて、よく描かれているか。
- ☐ 5W1H(いつ、どこで、誰が、何を、なぜ、どのように)が、きちんと押さえられているか。
- ☐ 第三者(読者)が読んでも、きちんと理解できる内容か。読者を混乱させる文章になっていないか。(たとえば、昔の話と今の話が混在し、何度も行き来する構成になっていないか)
- ☐ 文章を読みやすく整理できているか。(例：重複している文、あいまいな表現などを削除する)
- ☐ 主語の表記は統一されているか。(例：「私」「僕」など)
- ☐ 「あれ」「それ」などの指示語は、何を指しているかが理解できるよう、具体的な言葉に置き替えてあるか。(例：あれは木を削る道具だ。→カンナは木を削る道具だ。)
- ☐ 固有名詞(地名、人名、道具の名称など)は正しく表記しているか。また特別な読み方の場合は、ふりがなをつけているか。(例：斧(よき))
- ☐ 言葉が抽象的でないか。(例：「いろいろな植物」→「20種類を超える植物」)
- ☐ 一文は長すぎないか。句読点や改行をうまく活用しているか。
- ☐ 「あのう」「えーと」などの口癖は、読みやすく整理されているか。
- ☐ 専門用語には、簡単な説明や補足を加えているか。
- ☐ 読者の興味をそそるような題名や、わかりやすい小見出しがついているか。
- ☐ 年号(日本の年号と西暦)や単位(センチ、cmなど)の表記は統一されているか。
- ☐ 誤字、脱字はないか。

第3章

小学生による聞き書き —三原市立木原小学校の活動—



「聞き書き」は、録音テープの書き起こしという作業を伴うため、その作業時間を確保することが難しく、小中学校の授業には取り入れにくい、といった意見を先生方からよく聞くことがあります。けれども、「聞く」という行為とそこから得られる学びは、子どもたちの「学ぶ力」「考える力」「表現力」「振り返る力」「主体性」「他者への理解」「自分をみつめる力」などを育むために、小中学校でも、きっと役立つはずです。大阪でアマモ場の再生活動に取り組む岩井克巳さんを通じて、三原市立木原小学校とのご縁ができ、はじめて小学校での「聞き書き」を行うことになりました。同小学校の「聞き書き」の授業をここで紹介します。

スナメリプロジェクトと「聞き書き」

広島県三原市立木原小学校は、瀬戸内海に面した高台に位置する小規模校です。木原沖（学校のすぐ目の前）には、2つの島「大鯨島」と「小鯨島」があり、かつてスナメリ（ネズミイルカ科スナメリ属に属する小型のイルカ）がすんでいました。今は見られなくなってしまったスナメリがもう一度、木原沖に戻ってくることを願い、5・6年生は、平成27年から「スナメリプロジェクト」に取り組んでいます。担当教諭は原田圭輔先生です。

原田先生によると、初年度はスナメリのことを知るために、宮島水族館の見学や地域の方にスナメリの話を聞く活動を行ったそうです。また、瀬戸内海エコツーリズム協議会の上嶋英機理事長の協力を得て、鯨島に上陸。海辺の生き物の生息環境について調査しました。鯨島の調査を通して、子どもたちは、鯨島の岩肌が泥に覆われ、生き物がすみづらい状態になっていることや、スナメリの餌となる魚が少ないことなどに気づいたと言います。

一方、年間を通してスナメリを観察できる周防大島も訪れ、船の上から、海を泳ぐスナメリの姿を見る機会も得ました。ニホンアワサンゴの群生地なども視察し、周防大島の海の生き物の豊かさを子供たちは実感したそうです。

それらの体験を踏まえて、子どもたちはスナメリ

が戻ってくるために自分たちができることについて話し合いました。

子どもたちは、右頁表のように、スナメリが戻ってくるためには、「水質」、「食べ物」、「住みか」の3つが大切であることを整理しました。

重要なのは、この3つは別々ではなく、すべてがつながっているということです。住みかとなる海草は、水質が悪いと育たない。海草が豊かでないと、スナメリの餌がいっぱいある環境も実現できません。そこで、スナメリにとって少しでも住みやすい環境を整えるために、「海のゆりかご」といわれるアマモに着目し、アマモを増やす活動に取り組んでいます。

「木原の海にスナメリを戻す」ためには、「木原の海をきれいにする」ことが必要だと気づいた子どもたちは、平成28年度から、以下、3つの活動に取り組むことになりました。

- ①木原の海を調べる（鯨島の調査）
- ②アマモを増やす（アマモの苗づくり）
- ③海を知る（関係者へのインタビュー）

年度の初めには、尾道で屋形船を経営する魚谷成生さんに、スナメリやアマモについてお話を聞くと

項目	木原の海	周防大島の海	備 考
水 質	・鯨島での COD（D）検査によると 4 m g / ℓ。ややよごれている。（7 月 14 日実施） ・生物指標では、「きれい～ややよごれている」であった。 ・鯨島の東側より西側の方がきれいだった。	・海水浴場の酸素濃度は A（最高） ・海水浴場以外も「きれい」 ・海水を顕微鏡で観察したら、緑色の微生物（動物プランクトン？）が見えた。	周防大島のデータは周防大島役場生活かんきょう課に問い合わせた。
食べ物	・直接のエサとなるカタクチイワシやコノシロ、イカナゴなどは確認できなかった。 ・小さな魚などもほとんど確認できなかった。	・船でスナメリウオッチングをしていると、スナメリの現れる海面近くに多くの魚がいた。（魚による波立つところを「なぶら」というと教えてもらった。）	地家室の海にダイバーが潜って海の中をみせてくださった。その時いろんな種類の魚が見え、豊かな海だと感じた。
住みか	・鯨島の西側は、アマモやアオサ、コンブ等が確認でき、ウニやヒラメなどがすんでいたが、東側はミルがわずかに生えている程度で、ハゼぐらいしか確認できなかった。 ・潮溜まりには、多くの海藻が生えており、貝類、ゴカイ、カニなどがいた。	・アワサンゴや水草・モなどが海中たくさん生えていて、小魚たちだけでなく、海の生き物の住みかになったり隠れ家になっている。 ・周防大島では、以前漁の住みかとなるものを海に沈めたと聞いた。そのため、魚がたくさん住めるようになり、魚の数も増えたそう。	40～50 年前の鯨島周辺は多くのアマモでおおわれていた（聞き取り）と聞いたが、今回の調査ではほとんどアマモが見られなかった。

ともに、コアマモが生えているという「ほそのす」の調査を行いました。鯨島の調査は上嶋さん、アマモの苗づくりは岩井克己さん（NPO 法人大阪沿岸域環境創造研究センター専務理事）が中心となって、引き続き授業をサポートしています。

あわせて、子どもたちは、はじめて漁師さんに「聞き書き」を行うことになりました。漁師さんへの「聞き書き」は、スナメリプロジェクトの目標である「木原の海をきれいにすること」や「スナメリを木原の海に戻すこと」とは、一見、関係がないようにも思えます。しかし、漁師という仕事について知り、漁師の海に対する思いを感じることを通して、子どもたちは、さらに海について関心や愛着をもつのではないかと、原田先生は考えたのです。木原の海のことをよく知り、長年、その海と関わりあいながら暮らしてきたのは、地元の漁師にほかにありません。そして「聞き書き」当日の授業は、NPO 法人共存の

森ネットワークがお手伝いすることになりました。

「テーマ」に興味をもたせる

今回、「聞き書き」にご協力をいただいたのは、三原市漁業組合の 3 人の漁師さんです。濱松照行さん（組合長）は刺し網漁、松原政義さん（理事）はタコつぼ漁、岸逸美さん（理事）は一本釣り漁が専門ですが、いずれも、タコつぼ漁ないしタコの一本釣りをしていると、事前に原田先生から伺いました。タコは三原の名産でもあるので、今回は、タコを中心に漁師さんにお話を聞くことになりました。木原小学校は全学年、複式学級で授業を行っています。5・6 年生の人数は 12 人。4 人ずつ 3 チームに分かれて、話を聞くことにしました。

「聞き書き」を行うためには、事前に、ある程度、「質問」を準備しなければなりません。しかし、いきな

り「漁師さんへの質問を考えましょう」と言っても、子どもたちにはイメージがわからないだろうと思いました。学校のすぐ目の前に海はありますが、普段は、漁師さんとの接点はなく、漁業について知る機会もないからです。そこで、はじめに、みんなでタコの絵を描くことから授業をはじめました。

三原の名産がタコであることは、子供たちもよく知っています。各自、思い思いに、そのタコを描いてもらいました。出来上がった絵は、友達の絵と見比べてみます。そして「タコの足は何本かな」「タコに手はあるのかな」「タコの口はどこかな」と、子どもたちに問いかけていきます。たとえば、タコには「漏斗」（ろうと）と呼ばれる器官がありますが、それは「口」ではないこと。海水を噴射して移動したり、あるいは墨を吐いたり、糞の排泄や産卵のための器官であることなどを説明していきます。子どもたちにとっては身近なはずのタコですが、まだまだ、知らないことはたくさんあること。人間から見ると不思議な生き物であることなどを話しながら、では、そのタコを捕る漁師さんは、タコをどうやって捕るのか。いつ、どんな道具を使って捕るのか、といったことを問いかけ、考えてもらいました。

第 2 章で取り上げた日生中学校の「聞き書き」の場合には、牡蠣養殖の体験活動やアマモ場の再生活動が、漁師さんや漁業の現場と直接出会う接点となっており、その体験が話を聞くための前提として位置づいています。しかし、木原小学校の子どもたちにとって、漁師さんと会うことは、これが初めてです。スナメリや海の環境について学習は行っているものの、漁業について学んだことはありません。「聞く」ための導入として、まずは、子どもたちに、漁の対象となるタコについて、多少の知識なり、興味・関心をもってもらいたいと考えた、ささやかな工夫です。

質問を具体的に考える

「聞く」テーマについて、ある程度の事前の知識や興味、関心をもてるようになれば、「聞く」ため

の最低限の準備ができたことになります。具体的な質問を考えていくことが、次の作業になります。

一般にインタビューするというと、テレビ番組のレポーターを思い浮かべる人がいるかもしれませんが。たとえば、農家の方にお話を聞くときに、あるレポーターは、こう問いかけます。

「今年は豊作でよかったですね。この一年で一番、苦労したことは何でしたか」

「聞き書き」では、「一番うれしかったことは何ですか」「あなたにとっての生きがいは何ですか」といった抽象的な質問は、できるだけしないようにと指導しています。抽象的な「主観」を問う質問ではなく、具体的な「行為」を問う質問を繰り返す中で、その人の仕事や暮らしのディテール、ひいては働くことや生きることに対する姿勢が見えてくるからです。

たとえば、「木を伐る」という作業ひとつ聞く場合にも、どのぐらいの樹齢の木を伐るのか。どんな道具を使うのか。伐る木はどのようにして選ぶのかななどを丁寧に聞いていきます。ひとつひとつの作業内容を確認し、聞く中で、その技術の合理性、あるいは、その人なりの工夫や森に対する愛情なども垣間見えてくるのです。そして、「木を伐る」ことひとつ、決して簡単ではなく、熟練した技術が必要なこと。場合によっては危険も伴う作業であることなどがわかってはじめて、仕事の厳しさ、やりがい、喜びなどが説得力をもって伝わる作品が仕上がるのです。

けれども、そのような質の対話を、いきなり小学生が行うことはできません。そのため、質問を考えるポイントは、以下の 6 つであることを子どもたちに伝えました。

- ①いつ ②どこで ③誰が ④何を
- ⑤どのように ⑥なぜ

いわゆる 5 W 1 H です。それらの質問を重ねながら、その仕事なり作業が、具体的に映像（絵）として思い浮かぶように聞いていくことが大切だと教えます。

質問は具体的にしよう！

いつ？

なぜ？

どこで？

どのように？

誰が？

何を？

話を聞いて、
そのときの様子を
思い浮かべることが
できるかな？

また、質問項目を準備した場合に、よく子どもたちがすることは、上から順番に、ひとつずつ、一問一答式で聞いていくことです。「聞き書き」では、ひとつの質問に対して、「話し手」からの答えが返ってきたときに、さらに続けて、その内容を詳しく聞いていくように質問を積み重ねることが大切です。そのため、5W 1Hを意識しながら、いくつか質問を重ねていく練習をしました。

タコ漁の写真を見せながら、私が漁師さんの役を演じます。「私は、今年で70歳になる漁師です。若い頃から、ずっと、三原でタコをとってきました。このタコつぼを使ってとります。みなさんはタコをとったことがありますか。私に質問したいことがある人はいますか？」

とはいえ、子どもたちから、なかなか質問は出てきません。

そこで、「いつ」と書いた言葉を指さします。「この言葉を使って質問できる人はいますか」

「タコは、いつ、とるんですか」という質問が出ます。さらに「どこで」「どのように」「なぜ」といった質問を、次々と考えてもらいます。5W 1Hを意識すれば、たくさんの質問が考えられること。それによって、タコ漁という仕事が具体的に見えてくること。インタビューは、面白くて楽しいということ、子どもたちに感じ取ってもらえれば成功です。

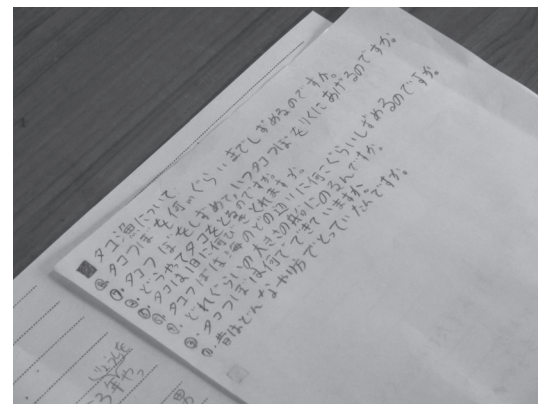
以上の練習を踏まえて、ここからは、子どもたち一人ひとりが、質問を考えていきます。

子どもたちには、以下、6つの質問をあらかじめ

書いた用紙を配り、各テーマにあわせて、思いつくりの質問（いつ、どこで、誰が、何を、どのように、なぜ）を、それぞれ書いてもらいました。

- 1) 漁師さんのこと（年齢、所属、主な漁法、生い立ち）
- 2) タコについて（漁業対象となる生き物の生態について）
- 3) 漁法について（タコつぼ漁、あるいはタコの一本釣りについて）
- 4) 漁師さんの一日について（あるいは一年）について（一日の仕事、四季に応じた仕事）
- 5) 海の環境の変化について（昔と今の環境の違い、アマモ場のこと）
- 6) スナメリについて（木原沖にかつて生息していたスナメリのこと）

「海の環境の変化」や「スナメリについて」は、木原小学校が行ってきた、これまでの学習とも関連するテーマです。



ある程度、質問が出尽くしたら、グループで、それぞれがどんな質問を考えたかを共有し、テーマごとに整理します。どのテーマを誰が質問するか。質問する順番も含め、各自の役割分担を決め、インタビューの準備は完了です。

インタビューをする

「聞き書き」のためのインタビュー（対話）と、一般的な「会話」（おしゃべり）には、大きな違いがあります。「会話」（おしゃべり）は、「話し手」と「聞き手」が自由に入れ替わる形で、やりとりが続きます。気の許しあえる友達同士ならば、それは楽しく、たわいないものでしょう。「聞き書き」のインタビュー（対話）の場合は、どちらか一方が「聞き手」、もう片方は「話し手」という、明確な意識をもつところからスタートします。そして「聞き手」には、最低限の礼儀や作法があります。また、話を聞く目的もあります。そこで、木原小学校では、以下のような流れや注意点を事前に子どもたちに説明し、話し手となる漁師さんを教室にお迎えしました。

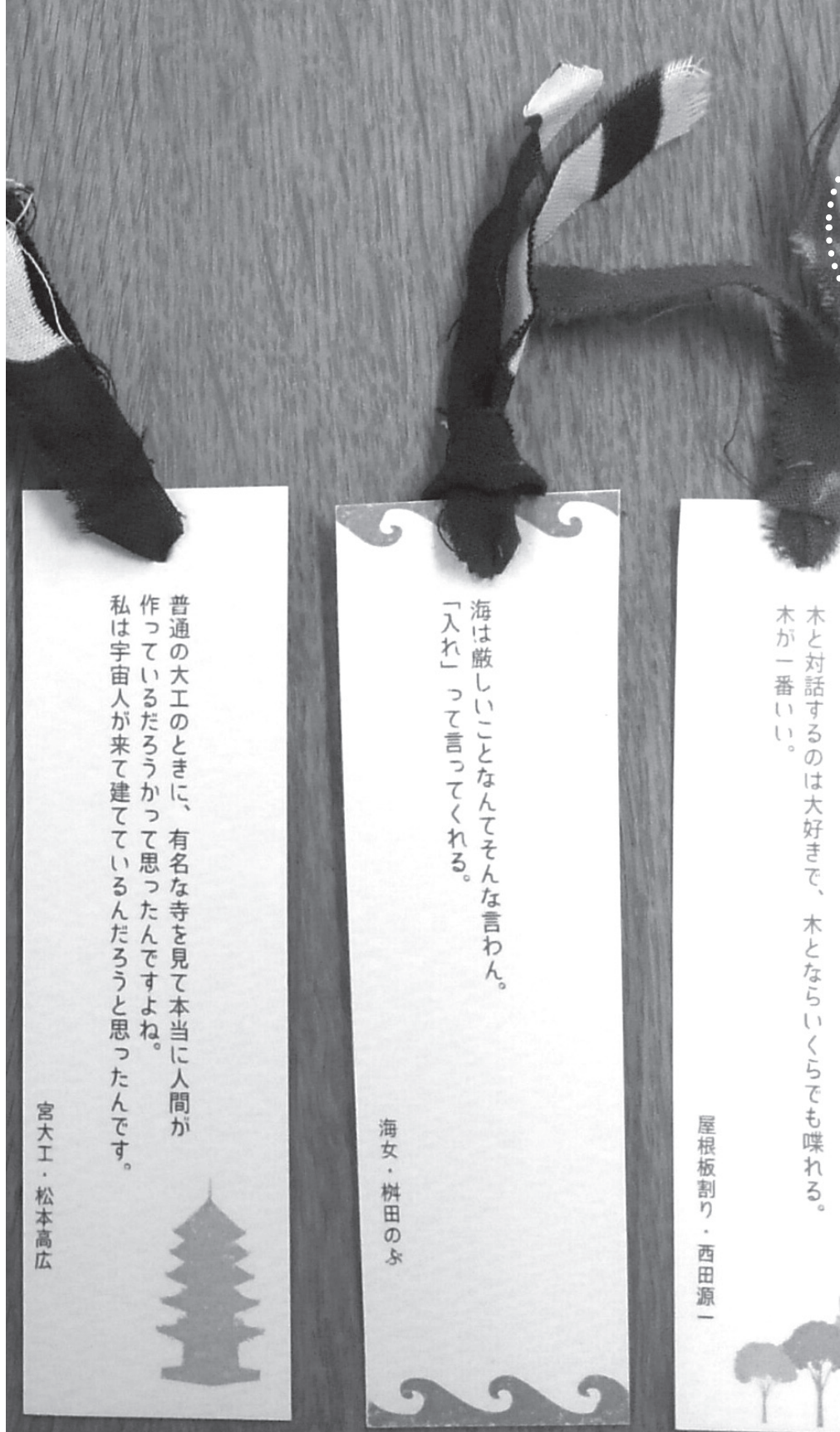


- ① インタビューをはじめる前には、きちんと挨拶をすること（自己紹介もする）
- ② きちんと相手の方と向き合って質問する（下を向いたり、余所見をして質問をしない）
- ③ 共感する気持ちや感動は素直に表現する（相槌をうつ、驚きを表現するなど）
- ④ 相手を敬う気持ちを大切にする（きちんと聞く、相手の言ったことを否定しない）
- ⑤ わからないことや聞きたいことは、しっかり質問する（目的をもつ）
- ⑥ 話を聞き終わったら、感謝の気持ちを伝える

「話し手」となる漁師さんは3人（前述）。3つのグループに分かれて、それぞれ4人の子どもたちがインタビューを行いました。子どもたちは、担当するテーマに即して、一人ずつ、順番にインタビューしていきます。インタビューをしない残りの3人は、その場でしっかりとメモをとるようにしました。念のため、録音はしましたが、それを書き起こす作業は、はじめから想定しませんでした。小学生が録音

第4章

「聞き書き」の アウトプットの形



したデータを書き起こすことは難しい、それだけの作業時間を授業でとることはできないと判断したからです。

今回、5年生と6年生の児童が、この「聞き書き」に取り組みましたが、小学生がメモをとる集中力とそのスピードには、本当に驚かされました。インタビュー時間は約30分。その間じゅう、教室には、メモをとる鉛筆の音が響きます。どのグループも、しっかりと聞き、メモもとることができました。

その日のうちに、簡単なまとめ作業を行いました。それぞれが印象に残った話を、短く文章にまとめます。質問を考えてもらった時と同様に、文章をまとめる際には、いつ、どこで、誰が、何をどのようにしたのか。なぜ、そうしたのかがわかるように意識しながら、まとめてもらいました。

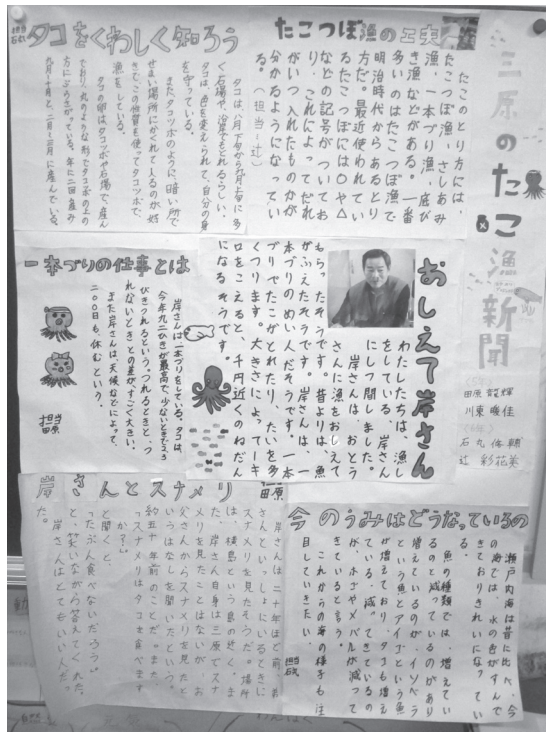
これが、新聞づくりの素材のひとつになります。

新聞にまとめる

はじめに、前日にまとめた各自の文章を、グループで共有しました。どんな話を聞いたかの振り返りを行い、新聞にまとめる記事の内容を検討します。その際に、必ず載せてほしいと指示したのは、「話し手」となった漁師さんの紹介文だけです。新聞の見出しや全体のレイアウト（記事の配置）も、いくつかの見本（例）を見せて、あとは自由に考えてもらうようにしました。

クイズ形式やQ & A形式でまとめを行うなど、読み手を飽きさせない工夫は、子どもたち自身が考えたものです。

聞き書きの指導から新聞づくりまで。この一連の授業は、事前指導（聞き書きに関する講義、質問を考える、役割分担を決める）に90分（45分×2）。インタビュー（漁師さんの紹介、グループごとのインタビュー、印象に残った話をシートにまとめる）に同じく90分（45分×2）。新聞づくりとお礼の手紙を書く（新聞の内容とレイアウトを相談する。役割分担し記事を書く。書いた記事を模造紙に張り、見出しをつける。漁師さんにお礼の手紙を書く）に



225分（45分×5）の授業時間を割いて、実施しました。

その後、木原小学校では、福山大学のマリンバイオセンターを見学した際に、「聞き書き」の学習経験を活かして、大学の先生から聞いた話を新聞にまとめたそうです。また、今年度は、地域の方々から、昔、スナメリがいた頃の話の聞き、新聞にまとめる活動を行いました。昨年度の5年生が6年生になったので、はじめて「聞き書き」をする5年生には、6年生が教えるようになりました。

「聞き書き」は、地域の人、漁師さん、海の専門家など、子どもたちがたくさんの人と出会い、つながるきっかけになります。聞いたことを新聞などにまとめて、発表することは、取り組みを多くの人に知ってもらうきっかけにもなります。

子どもたちが大切にしたい海、スナメリが戻る海には、漁師さんをはじめ、たくさんの人もまた関わっていること。海をきれいにすることは、地域の人にも、きっと喜んでもらえることだということを実感しながら、この活動がさらに多くの人の輪によって支えられ、活発に展開することを願っています。

朗読は、お年寄りから子どもたちまで、話し手の想いを、みんなで分かち合うことができる方法です。

POINT

- ・朗読会のプログラムにあわせて、いくつかの作品を、それぞれ何分ぐらいかけて朗読するのかを検討し、朗読用の原稿を整理する。
- ・朗読の練習をしっかり行う（アナウンサーなどの専門家の指導があれば、なおよい）

④演劇で伝える

日生中学校では、秋に文化祭を開きます。その中で、中学生は、日生の漁師さんが長年行ってきたアマモ場の再生活動をテーマに、劇をつくり、上演しました。これまで数年間、行ってきた「聞き書き」の集大成です。生徒たちは、「聞き書き」の過程で、活動の歴史や漁師さんの思いをしっかりと受け止めています。当日は、生徒ひとりひとりが、その漁師さんになりきって、その努力や熱意を来場者へ伝えました。「聞き書き」をもとにつくられたセリフは

臨場感があり、演劇を見た地元の方からは「昔を思い出した」「自分たちの活動が意味のあるものだ」ということに改めて気づいた」「胸が熱くなった」という感想がありました。中には感動して、涙を流している人もいました。

演劇は、「聞き書き」した「話し手」と「聞き手」双方の思いを、より多くの人の心に訴えかけ、共感を広げることができる方法です。

POINT

- ・複数の人に「聞き書き」した内容から、演劇で伝えたいこと、エピソードとして盛り込みたいことなどを精査し、台本をつくる。
- ・役は、「聞き書き」をした生徒自身が演じる。

このテキストを読んで、「聞き書き」をやってみようかな、と思っていただけたでしょうか。

このテキストの中では、森・川・海とともに生きてきた人たちへの「聞き書き」を中心に紹介させていただきましたが、「聞き書き」自体は、平和学習や人権教育などにも取り入れ、実践することができます。このテキストを執筆いただいた日生中学校の藤田孝志先生も、初めは「聞き書き」の活動について何も知りませんでした。けれども、私たちの団体が長年行ってきた「聞き書き甲子園」の話を聞いて、『聞き書き』はいい学習ツールだ！と判断し、海洋学習の一環として「聞き書き」に取り組むというチャレンジをしてくださいました。また、木原小学校の原田圭輔先生には、小学校で取り組むという機会を、共につくっていただきました。こうした活動をきっかけに、学校や地域から、あるいは海外からも「聞き書き」に取り組みたいと、声をかけていただくことが増えてきました。

「聞き書き」には、子どもや若者たちを大きく変えるきっかけがつかっていると考えます。

今から16年前に始まった「聞き書き甲子園」では、高校生が、造林手、炭焼き、船大工、木工職人、漁師や海女といった、森・川・海の“名人”たちと出会います。そこで高校生が触れるのは、熟練の技（わざ）だけではありません。先人から受け継いできた知恵の深さ、名人がその仕事を黙々と続けてこられた時間、そして、それを次世代につないでいきたいという熱い想いです。名人の想いの深さを知ったときに、自分を取り巻く世界の広さや豊かさにも気づくことができるのではないだろうか。その世界を、そして自分の足元の故郷を大切にしたいと思えたときに、人はまた、未来に向けて動き出すことができるのではないだろうか。そんな期待とともに、「聞き書き」の活動が、さまざまな地域で、あるいは学校の授業の中で、さらに広がることを願っています。



名人と出会い、 自分と出会う

—「聞き書き」と海洋教育の可能性—

2017 年 11 月 10 日 発行

製 作：NPO 法人共存の森ネットワーク

デザイン：岩井友子

協 力：岡山県備前市立日生中学校 藤田孝志教諭

広島県三原市立木原小学校 原田圭輔教諭

この冊子は、公益財団法人日本財団の助成により製作しました。

